

2022年度 SDGs プロジェクト 1 成果報告書 (3年次)

複雑系の実践↔制度のアプローチの枠組み
～令和の教育にビルドインする～

分冊 2：川根本町（静岡県）



2022年度
ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム プロジェクト1(P1)
成果報告書(3年次) 目次

<分冊1 26日第2部 南砺市(富山県)>

- ◆Ⅱ 南砺市(富山県)の教育改革～3年間の成果と課題
松本 謙一(南砺市 教育長) 分冊1-4
- ◆指定討論・意見交換
福嶋 真治(福知山公立大学 准教授) 分冊1-30

<分冊2 27日第2部 川根本町(静岡県)>

- ◆Ⅱ 川根本町(静岡県)の教育改革～3年間の成果と課題
山下 斉(川根本町 教育長) 分冊2-4
松本 治樹(川根本町教育委員会 管理主事)
渡邊 哲也(川根本町立 中川根第一小学校校長)
- ◆指定討論・意見交換
佐々木 織恵(開智国際大学 准教授) 分冊2-33

<分冊3 26日第3部 複雑系アプローチの学校改善の実践研究>

- ◆Ⅲ 複雑系アプローチの学校改善の実践研究
赤星 信太郎(静岡大学教職大学院 現職教員院生) 分冊3-4
- ◆指定討論・意見交換
小岱 和代(静岡大学教職大学院 特任教授 実務家教員) 分冊3-27
- ◆おわりに
分冊3-34

<分冊4 26日第1部・27日第4部 複雑系の実践⇔制度のアプローチの教育改革>

■26日第1部

- ◆シンポジウムポスター
分冊4-1
- ◆学部長あいさつ
熊倉 啓之(静岡大学教育学部 学部長) 分冊4-6
- ◆Ⅰ プロジェクトの概要とシンポの企画趣旨
梅澤 収(静岡大学 特任教授/プロジェクト1(P1)・リーダー) 分冊4-7
- ◆各活動報告
川根本町・南砺市・ESD ほりぶ・IML・若者プロジェクト 分冊4-18

■27日第3部

- ◆Ⅲ 複雑系の実践⇔制度のアプローチの教育改革
梅澤 収(静岡大学 特任教授/プロジェクト1(P1)・リーダー) 分冊4-24
- ◆指定討論
千葉 直紀(インパクトマネジメントラボ 共同代表) 分冊4-56
- ◆おわりに
分冊4-62

複雑系の実践⇄制度のアプローチの枠組み

～令和の教育にビルドインする～

趣旨 2つの自治体のホリスティックな義務教育学校の構想を検討する

第1日

2023
2.26

(sun)

13:30

↓

16:30

はじめに - ZOOM 入室 13:10

第1部

- ◆ プロジェクトの概要と今回のシンポジウムの趣旨

第2部

- ◆ 南砺市(富山県)の教育改革～3年間の成果と課題
- ◆ 指定討論 <福島真治(福知山公立大学准教授)>
- ◆ 意見交換



休憩 10分

第3部

- ◆ 赤星信太郎(教職大学院 現職教員院生)
「複雑系アプローチの学校改善の実践研究」
- ◆ 指定討論 <小岱和代(教職大学院特任教授 実務家教員)> / ◆ 意見交換

おわりに

はじめに - ZOOM 入室 13:10

第1部

- ◆ シンポジウムの趣旨

第2部

- ◆ 川根本町(静岡県)の教育改革～3年間の成果と課題
- ◆ 指定討論 <佐々木織恵(開智国際大学准教授)> / ◆ 意見交換



休憩 10分

第3部

- ◆ 梅澤収(静岡大学特任教授)
「複雑系の実践⇄制度のアプローチの教育改革」
- ◆ 指定討論「発展的評価(Developmental Evaluation)からのコメント」
<千葉直紀(インパクトマネジメントラボ共同代表)> / ◆ 意見交換



おわりに

◆ ——— プロジェクト1 ——— ◆

ESD・SDGsを地域・学校改革とつなぐ

持続可能な開発のための教育(ESD)とは、持続可能な社会の担い手<創り手>を育む教育です。世界にある様々な現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そして、それによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。

持続可能な開発目標(SDGs)とは、発展途上国のみならず、先進国自身も取り組む2016年から2030年までの国際的な目標で、持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成されています(ユネスコ国内委員会メッセージ2017より)。

プロジェクト1は、「公立小中学校の組織・カリキュラムのモデル開発を行い、ESD実践の推進と学校改革を両立させる知見を全国に発信する」ことを目的としています。

巻頭言

ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム（基幹大学：静岡大学教育学部）は、2016年度からユネスコ活動費補助金の採択をこれまで3件（各最大3年間）受けています。2020年度からは「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」の公募採択により、次のプロジェクト事業を行ってきました。

○「ESD実践の基盤となる公立学校の組織・カリキュラムのモデル開発」（SDGsP1）

このプロジェクト（SDGsP1）は、公募分類1（カリキュラム等開発・実践）のプロジェクトですが、3年目（2022年度）の公募申請が不採択となりました。そこで、静岡大学の（プロジェクト事業）「終了後の（経費）支援」を受けてプロジェクト内容・規模を縮小し、今年度活動を実施しました。

本報告書は、この3年次2022（最終年度）の活動報告書（2023年3月発行）です。初年次2020（第1回）報告書は2021年2月、2年次2021（第2回）報告書は2022年2月に発行しました。

SDGsP1の目的は、SDGs未来都市・南砺市（富山県）及び川根本町（静岡県）のホリスティックな学校改革を支援しながら、モデル開発の研究成果を全国に発信することです。2年次には、2つの参加自治体に加えて、帰還困難地の教育創造に取組む大熊町（会津若松市、3年目は辞退）を得ました。今回は、事業開始から3年経過しているため、その活動の全体総括も含めた報告書となっています。

P1事業の特色は、「教師が内発的・創造的に実践・活動を行い、その成果を学校改革とシステム転換に繋げる」という理論枠組みのもと、若手教育研究者（8名から9名へ）を結集した組織「ESDほりぷ」を立ち上げたことです。当初は、事業自体と各自自治体の教育改革支援の全体像の可視化のために社会的インパクト評価手法であるロジック・モデル（LM）を作成し、支援活動を行う方向性を探究しました。しかし、2年次に日本教育政策学会と共同開催した公開シンポジウム「EBPM時代における教育実践と制度改革の枠組みの構築～公立学校の変革支援の枠組みをどう創るか～」を契機に次のような取組みに転換しました。すなわち、「自治体の教育改革支援の枠組みと大学教育・教師教育の改革枠組みを「機関包括型(whole-institution)アプローチで探究する方向性」です。

これを受けて3年次は、自治体の改革支援のさらなる推進と検証、モデル開発の理論的・実践的な総括的な検討を行って、全国にその成果と課題を発信することとしました。主な活動は5点です。

1. 自治体の教育改革支援の活動等は、引き続きそれぞれの自治体で展開しています。2つの自治体の教育改革はプロジェクト開始から3年経過しましたので、改革の進捗状況と成果と課題を整理しました。
2. 「モデル開発」の枠組みに基づいてまとめた「教職大学院の改革方向性」を確認して、教職大学院改革プロジェクトを立ち上げて活動を開始し、全国5大学の教職大学院のインタビュー調査を行いました。
3. 全国5大学の教職大学院のインタビュー調査では、プロジェクトメンバーだけでなく、静岡大学教職大学院の現職大学院生も調査に参加していただきました。他の教職大学院の現職教員との意見交換の機会は非常に有意義であったようですので、今後の展開が期待されます。
4. 若者(youth)がESD/SDGsの活動を企画実施する活動を行いました。大学教員が支援し、大学生が中学校の生徒に防災・減災学習を、ESD/SDGsの視点を入れて授業を行いました。
5. 第1回(2021.2.4)、昨年度第2回(2022.1.25)に続き、プロジェクトの最終成果報告会を兼ねて、第3回シンポジウム「複雑系の実践⇔制度のアプローチの枠組み～令和の教育にビルドインする～」をZoomにより、2日間にわたり開催しました(2023.2.26<日>,27<(月)>)。

さて、中央教育審議会は「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会を置き、昨年12月19日に答申を出し、改革工程表を示しました。答申は、学校と教師の役割の現代的な変化を指摘し、それを教師の資質・能力向上とNITS(教職員支援機構)の整備充実による研修(学び支援)、管理職による教師に対する学びの管理と指導の枠組みを柱にして提示しています。本プロジェクトは、答申の考え方を取り入れながらも本格的に学校のシステム転換を視野に入れた教育政策と学校・教師改革の実践・検証を繋げることです。

具体的には、「教師の内発的実践力を引き出し、学校制度(システム)を質的に転換する枠組み(システム思考)を理論的実践的に探究する」ことです。残念ながら、答申には、学校と教師の構造的なシステム改革(変容)という転換期の視点が希薄な(ない)ために、結局は教師に過重な責任を押し付ける論理(考え方)となっています。問われるべきは、学校・教師のシステム構造改革に重大かつ多大な責任を負う(期待も大きい)教育政策担当者、及び教育行政担当者のあり方・役割、指導主事や校長・副校長・教頭等の教育リーダー・学校管理職の役割(リーダーシップ)と責任等の観点です。

内発的実践者としての教師と、教育政策・行政担当者や校長等が双方向(実践⇔学校⇔政策)の良好な円環関係を構築できることによるのみ、実効性のある教育改革の実践を創造することができると考えます。

最終年度の本報告書がどれだけ上記の内容に迫っているかは、みなさんの評価に待つことにしますが、この方向性で、みなさんとともに令和の教師教育改革を創造していくことを期待しております。

2023（令和5）年3月10日

梅澤 収（静岡大学特任教授）プロジェクト（P1）リーダー



川根本町（静岡県）の教育改革～3年間の成果と課題

川根本町教育委員会 山下 齊 教育長
川根本町教育委員会 松本 治樹 管理主事
町立 中川根第一小学校 渡邊 哲也 校長

ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム プロジェクト1(P1) 3年次(第3回)シンポジウム
ESD 実践の基盤となる公立学校の組織・カリキュラムのモデル開発
複雑系の実践⇔制度のアプローチの枠組み～令和の教育にビルドインする～
2023年2月26日(日) 27日(月) 2日間 ZOOM オンラインのみ
共同開催：静岡大学(主幹大学) 川根本町教育委員会 南砺市教育委員会

第2日(2月27日<月>) 記録Ⅱ

第Ⅱ部 川根本町(静岡県)の教育改革～3年間の成果と課題 司会(森 透)

山下 齊(教育長) 松本 治樹(教育委員会管理主事) 渡邊 哲也(中川根第一小学校校長)

(山下) 本日は、当町の教育施策についてご意見をいただける貴重な機会となることを大変うれしく思っております。私からは川根本町の教育施策の概要と、現在進めている学校再編計画の形成プロセスと実情について概要をお話しし、その後、松本治樹(管理主事)と渡邊哲也(中川根第一小学校校長)より、教育改革の詳細について説明をさせていただきます。

川根本町とその教育改革について(概要)

川根本町について簡単に紹介させていただきます。「水と森の番人が創る癒しの里」をキャッチフレーズとする当町は、静岡県の中央部に位置している中山間地域であり、東は静岡市、西は浜松市、2つの政令指定都市に隣接し、北は長野県と接しています。一級河川の大井川沿いに南北40km、東西23km、南北に細長い形状となっています。2014年に川根本町を含む南アルプス地域がユネスコエコパークとして登録され、また2015年には「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。なお本州で唯一、原生自然環境保全地域に指定されている町です。人口は、今(2023)年1月1日現在で6,078人、少子高齢化が進み、緩やかに人口は減少の一途をたどっています。基幹産業は「川根茶」を中心とした農業や林業ですが、豊かな自然や温泉など観光産業にも力を入れています。特に、大井川鐵道南アルプスアプトラインのトロッコ列車で行く「奥大井湖上駅」や、死ぬまでに渡りたい世界の徒歩吊り橋10選に選ばれた「寸又峡夢の吊り橋」など、四季折々に美しい風景を見せてくれる絶景スポットが多くあり、観光客から大変な人気を博しております。本日も参会のみなさまも機会があればぜひお越しいただき、当町の魅力に浸っていただければと思います。

教育施策の概要を説明いたします。本町には、現在小学校4校、中学校2校があり、いずれも小規模な学校であり、小規模校のメリットを生かした特色ある次世代教育を指向し、教育施策を推進しています。その中心施策として、町の4つの小学校と2つの中学校を緩やかな1つの学校と捉え、「学校間の連携授業(RG 授業)」実施しています。また、GIGA スクール構想に先駆けて、2017年度から全小中学校のICT環境を整備し、1人1台のiPadを全児童生徒および全教職員に貸与しています。コロナ禍や災害非常時などにおいても、オンライン双方向での通常授業を実施するなど、児童生徒、教職員にはICT機器活用の日常化が図られています。

そのような中、少子化の波がさらに進行し、あまりに小規模化した学校での教育活動や学校の存続を心配する声が、保護者や地域住民から聞かれるようになりました。そこで2018年度に「川根本町立学校設置適正化および教育のあり方検討協議会および研究会」を設置し、2年間をかけて協議会、研究会を実施しました。また、保護者や地域住民を対象に「子育て・教育にかかる意見交換会」を実施し、様々な意見をいただきました。これらの意見を踏まえ、協議会は2020年3月「持続可能な町づくりの視点から、義務教育学校2校への再編が適切である」という答申を示しました。

川根本町教育委員会では、この答申に基づき、総合教育会議の承認を得た後、2023年度に義務教育学校「(仮称)本川根学園」の設置および「(仮称)中川根小学校」の再編を、また、翌2024年度に義務教育学校「(仮称)中川根学園」の設置という学校再編の方針を決定し、2020年4月か



ら町内14カ所において学校説明会を実施しました。また、学校現場では、2021年度から教職員全員が参加するプロジェクトワーキングを実施し、学校再編計画を進めました。

ところが、ちょうど1年前、2022年3月、町議会3月定例会において、義務教育学校2校の開設に必要な工事費を含む、学校再編に関連する予算への理解が得られず、学校再編計画は一時停止せざるを得ない状況となりました。この議会での否決を受けて、教育委員会は、保護者、児童生徒、教職員に対し、教育長メッセージとして現状と今後に向けた思いを発信するとともに、首長部局との連携の下、関係機関と連絡調整を図りながら学校再編計画の再スタートを目指し、校舎の利活用を再度見直し、改修工事費などの緊縮を検討しました。並行し、学校再編説明会を再度、町内8カ所において行い、改めて本町が目指す学校再編計画について説明を重ねました。

その後、昨年9月までの町議会において、学校改修工事に伴う再設計の予算や学校設置条例の一部改正などが、賛成多数で可決され、学校再編計画を再始動させることとなり、今に至ります。

現在の学校再編スケジュールは、当初計画より一部変更し、2023年度「(仮称)中川根小学校」への再編を2024年度「(仮称)本川根学園」と「(仮称)中川根学園」の義務教育学校2校同時開校予定となっております。今後はより一層、児童生徒、保護者、教職員の思いを最優先に考えながら、首長部局との連携の下、教育施策に対し多くの支持をいただけるよう、情報発信に努めていきたいと考えています。

ロジックモデルの概要と令和4年(2022)度の取組み

(松本) 昨年4月から引継ぎ、本事業を進めております。前半はロジックモデルの概要とこれまでの経過について、後半は、今年度(令和4年度)の取組みです。

それでは、川根本町の学校再編に向けた、教育委員会と学校の取組みについて紹介していきます。「ロジックモデルを活用した持続可能な学校づくり」について説明します。学校再編の大きなねらいは、中山間地域における小規模校のメリットを最大限に生かした、持続可能な次世代教育の実現です。そこで、この大きな目標を実現させるため、ほりぷのみなさまなどからのご支援をいただきながら、教育課程や学校づくりのロジックモデルを作成しました。

ロジックモデルの作成にあたっては、最終アウトカムの検討から開始し、SDGsの視点とESDの視点から、令和7年度以降の学校や児童生徒、地域の状況をイメージして、それを最終アウトカムの姿として考えたものです。最終アウトカムに近づくための中間アウトカムの検討にあたっては、令和5年、令和6年あたりを想定して、現時点での教育を改革しながら、積み上げた時の姿をイメージして作成しました。キーワードの一つに「教員の内発的なアウトカム」を位置付け、教員の主体性を重視したいと考えました。

中間アウトカムで示した姿に迫るための初期アウトカムの検討については、令和3年、4年あたりに焦点を当て、令和2年度当時の課題に基づく姿を想定しています。また、児童生徒のアウトカムをコンピテンシー・ベースで、ESDにおける育みたい力に基づいて押さえました。

これはロジックモデルを作成した令和2年度の主な取組みです。各種説明会・意見集約、方針の決定、再編プロジェクトの枠組みに関する協議、個別最適化された学びの試行などを行いました。令和3年度は、4月早々に町内教職員を集める全体会を開催しました。これは、学校再編について自分事として受け止めていない教職員に危機感を抱いた校長会が、教育委員会と協議する中で実施につながったものです。全教職員が知恵を出し合うことで共有を図り、これが教職員の内発的動機付けになりました。

今年度(令和4年度)の教育委員会の取組み:持続可能な学校づくりに向けて

ここから令和4年度、今年度の取組み、「持続可能な学校づくりに向けて」を説明します。

まず、教育委員会の取組みです。教育委員会では、令和4年3月議会を受け課題を協議し、再編計画の見直しを行いました。先ほど教育長が述べたような経緯で、8月の臨時議会での「再設計

業務委託料に関する補正予算」、9月議会において「3小学校を1つの小学校に再編する条例」の一部改正につながりました。残り半年での3小学校の学校再編は、時間的に厳しいものがありましたが、再編計画を見直す中で役割を明確にし、学校がより主体となって自発的に進めるよう依頼しました。毎月の校長会で進行管理していくことをアウトプットとしました。必要に応じて適宜情報共有しながら進め、学校再編への計画的な準備、運営となるよう働き掛けました。教育委員会が取り組んだものの中から、学校説明会、校名プロジェクト、視察研修、コミュニティー・スクールの試行的取組みについて紹介していきます。

再編の再開にあたって、8月下旬から9月初旬にかけて、町内6カ所、計8回「川根本町が目指す未来を担う子どもたちのための学校づくり」と題して説明会を行いました。この説明会では、学校再編のスケジュールを共有し、川根本町が目指す義務教育学校について確認していただきました。

これは、その折に配布したパンフレットです。表紙には令和3年度に実施した保護者、地域代表、教職員で協議したプロジェクトワーキングの内容をまとめました。川根本町の共有ビジョンを、「北極星」に例え、目指す児童生徒像、児童生徒に育みたい資質能力、町全体で一人一人が同じ方向性を持って学校づくりを進めていくことを共有しました。

これは、保護者や地域の方から主な質問や意見をまとめた一部です。「子どもへの説明は、いつ誰がする予定か」「子どもたちの不安がないように対応してほしい」など、再編への児童や保護者の不安がアウトカムとして出されました。教育委員会では、これらを第一に考えて対応していくことを保護者に伝え、学校と連携し、様々な配慮について実施してきました。

次に校名プロジェクトです。令和5年度南地域再編小学校の校名について公募し、合計90名の方から60案が集まりました。どれも思いや願いのこもった校名がたくさん見られました。児童生徒の声を大事にしながら、ここに記した経過を経て3月議会で正式決定となります。「新しい学校への願いが込められ、その願いが伝わる学校にしたい」「川根本町から世界に羽ばたく子どもたちをイメージできる斬新な名前にしたい」「中川根、本川根という名前にはこだわらないほうが良い」「馴染みのある名前を取り入れていくのもいい」など、様々な意見が聞かれ、校名募集を通して学校づくりへの参画意識、学校への願いがアウトカムとして見られました。

次は、川根本町が目指す学校づくりについて深めようと、教育委員会が企画した県外視察です。本年度は富山県の南砺つばき学舎、名古屋市立山吹小学校の2校を視察しました。南砺つばき学舎の視察では授業参観をさせていただき、義務教育学校の進捗(しんちよく)状況、教育課程、特色ある取組みについて学びました。参加した教務主任が「新しい学校を自分たちで創りたい」「川根本町でも生かすことができる」と話し、新しい学校づくりに向けた思いが高まりました。山吹小学校の視察では、自由進度学習についての授業を参観し、その取組みの手立てやアイデアを学びました。実際に教員が直接自分の目で見て確かめ、感じることの大切さを実感し、次年度も視察について予算化していく予定です。

次はコミュニティー・スクールです。本年度、令和4年4月より試行的にスタートしました。町内中学校区にそれぞれ学校運営協議会を立てて行う計画でしたが、再編の遅れにより学校運営協議会の開催は遅れたものの、コミュニティー・スクールのスタッフが中心となり活動が活発に行われました。学校運営協議会は南北とも一回ずつの開催となりました。南地域では、次年度の新しい小学校について学校運営や教育計画について承認をいただきました。北地域では、学校と地域の活動について熟議を行い、その結果を学校の教育課程に生かしています。

地域学校協働活動については、コミュニティー・スクールスタッフが各校を巡回し、学校と地域をつなぎました。その様子から、「地域のひと・もの・ことを生かそうとする教職員の意識の向上」や「学校や子どもたちのために頑張りたいという地域の方の思いや願いの高まり」がアウトカムとして見られました。それでは、続いて学校の取組みに移ります。



義務教育学校への再編に向けた学校の取組み～ロジックモデルとの関連で～

(渡邊) 中川根第一小学校の校長の渡邊と申しますが、昨年度まで2年間松本管理主事の前任として教育委員会にお世話になっておりました。その間、教育長、管理主事から説明がありましたように、学校再編業務にも携わっていました。4月から現場の校長として教育委員会の取組みと学校をつなぎつつ、学校発の再編業務を進めております。今回のシンポジウムでは、学校における取組みとロジックモデルとのつながりについて、教育委員会から説明を求められたので報告します。

ここからは、主として令和5年度に先行再編する中川根地区3小学校が、令和6年度の義務教育学校への再々編を見据え、中川根中学校と連携して取り組んできたことを紹介いたします。

令和4年8月の臨時議会において、義務教育学校の再設計業務委託料を盛り込んだ「補正予算」が成立したことを受け、中川根地区では「4校校長会」を立ち上げました。以後、本日までに9回におよぶ4校校長会を開催する中で、新しい教育課程の編成に関する事、引っ越しに関する事など多岐にわたって協議を進めてきましたが、最も重視していたことは児童生徒の心のケアと保護者への説明でした。それは、中川根第一小学校での住民説明会に端を発します。

8月23日に実施した中川根第一小学校区での教育委員会による説明会終了後、参加した保護者が駐車場に集まり話を始めました。それは、突然再開することになった学校再編への不安でした。これを聞いていたコミュニティー・スクール・コーディネーターがすぐに校長室を訪ね、第一小学校単独の保護者会の開催を私に提案しました。これを私が了承し、スピード感が必要であると考え、9月2日と3日に臨時保護者会を開催し、学校再編に対する保護者の理解促進に努めました。

この説明会において、保護者から求められた「スクールカウンセラーの活用」、それから「新しい小学校での支援体制の充実」、さらには「現小学校での教育活動の充実」といったリクエストは、それぞれスクールカウンセラーによる「全児童との個別面談の実施」それから、「支援員配置の予算化」さらには「現小学校でのお別れ遠足の実施」など、全て形になって実施されました。これは、本校だけでなく再編を予定している3校全てで行われております。

このケースは、まさに保護者の思いが学校や教育委員会の取組みとしてアウトプットされたものであり、結果として児童の気持ちの変容などのアウトカムを生み出しました。8月末から9月初旬までの短期間に行われたこのことが、それ以後の4校校長会の基本的なスタンスを決定付けたとも言えます。なお、4校の共催による保護者説明会については、後ほど簡単に触れさせていただきます。

次に、児童生徒を対象とした取組みについて説明いたします。まず3小学校の校長は、夏季休業明けの始業式や集会で同一の原稿(資料)に基づき、子どもたちに学校再編の再開を伝えました。その上で「円滑な学校再編には、児童の円滑な人間関係が必要である」と考え、RG授業を復活させました。RG授業については、先ほど教育長から説明があったとおりです。中川根地区では、リレーションシップの向上と、新しい学校への機運醸成を目的として、このRG授業を実施しました。

令和4(2022)年10月25日に実施した第1回RG授業では、主として人間関係の構築に資する活動を行いました。レクリエーションや集団スポーツ、読み聞かせ等の活動を行う中で、他校の友だちと笑顔で交流したり、一緒になって本を読んだりする、こういった姿が見られました。また、小学校4年生から中学校1年生が中川根中学校の体育館に集まって、異校種、異学年協業によるワークショップを行いました。この時に集まった子どもたちは、令和6(2024)年度開校予定の義務教育学校で、6年生から9年生となって学校を支えていく子どもたちです。ワークショップは、新しい学校の校歌に込めたい思い、これを見える化し、機運を醸成することを目的にしていました。

これは、ワークショップの終盤に、ふるさとへの思いを五・七・五のフレーズに表した子どもたちの作品です。真ん中にある「ここだけのしぜんを走る赤電車」という作品は、特別支援学級に在籍する児童の作品です。大井川鐵道ののどかな風景が目浮かぶ心温まる作品だと思います。「自然」「大井川」「星空」「優しさ」といったキーワードが盛り込まれた全78の作品は、ワークショップ中盤までに、KJ法によってグループごとにまとめられた子どもたちの付箋とともに、作詞家に手渡され

ました。4 校校長会や各学年の教員の工夫によってアウトプットされた RG 授業が、「児童生徒の素直な思い」というアウトカムを引き出し、校歌の作詞にまでつながった取組みでした。

次に、教職員の取組みについて説明します。4 校校長会では、学校再編にかかる教職員の意識の向上を目指して、新しい教育課程編成のよりどころとなる教育計画書を、4 校の教職員に作成させることとしました。全校の教育計画書を比較検討し、校務分掌別に 18 のワーキンググループを開催しました。新しいグランドデザインにより学校経営方針を説明した後は、校務分掌事務の検討をグループリーダーに任せることとしました。

令和 4 年 9 月から 11 月にかけて延べ 39 回のワーキングを開催し、未処理案件は 0 件となりました。校務分掌の事務レベルで他校の教職員と検討するのは初めてでしたが、「定められた期間内に新しい方針を作成する」という共通認識の下、効率的に作業を進めることができました。この取組みにより教職員同士の相互理解が進むとともに、これまでの自分の学校を振り返り、当たり前のこととして取り組んできた教育活動を見直し改善を図るという教職員のアウトカムが見られました。

ロジックモデルの効用：前向きなアウトカムと保護者の発議

ロジックモデルには、「個別最適化に関する校内研修を実施した学校の割合」という成果指標を位置付けていました。これについては中川根地区の 4 校だけではなく、本川根地区の小中学校 2 校を加え、町教育委員会と町の全教職員で構成する川根本町教育会との連携によって、合同研修会を実現しました。川根本町教育委員会では、令和 6 年度の開設を目指している 2 つの義務教育学校を特色ある教育活動を実践する学校と位置付け、実践や研究の成果を広く発信し、全国から選ばれる学校づくりを目指していると常々、校長たちは要望を受けております。

特に、「個別最適な学びと協働的な学びの融合」による令和の日本型学校教育を先取りして児童生徒の資質・能力を幅広く、深く育てていきたいと考えています。そこで、本研修会ではイェナプラン教育を研究する法人から講師を招き、教職員の教育に対する観の転換を趣旨としてワークショップを開催しました。

また、昨年度末の人事異動は全国的に教員不足でした。川根本町の小学校でも 2 名の欠員が生じたため、中川根第一小学校に臨時講師を配置しました。この講師は、イェナプラン協会の事務局も務める教員であり、個別最適な学びの研究を進める上で大きな働きをしてくれています。この講師が、町の教員を対象に 7 月に公開した授業は、さまざまな意味で教員に刺激をもたらしました。その時の記憶や学びが、2 月 8 日の合同研修会に結び付き、参加した多くの教員から「これまで取り組んできた実践の方向性の確かさを確認できた」とか、「個別最適な学びを生み出す授業を実践してみたい」といった、前向きなアウトカムを生み出すことができました。

学校における取組みの最後として、保護者を対象とした説明会について説明いたします。先ほどお話したとおり、中川根地区 4 校校長会では、児童生徒への対応とともに保護者への説明を重視してきました。説明会は、令和 4 年 10 月、11 月、12 月に実施しました。年度当初の計画にはなかったため、学校にはスピード感と柔軟な対応が求められました。また、コロナ禍ということもあり、少しでも参加率を上げるため、10 月、11 月の説明会で対面形式とオンラインのハイブリッドとしました。質疑の時間を十分確保しどのような質問・意見も受け止め、「再編通信」で返してきました。

第 1 回、第 2 回の説明会では、小学生の保護者の参加率は 90%を超えました。特に、オンラインによる説明が定着した第 2 回説明会では、オンラインによる参加者が全体の 60%を超えました。なお、第 3 回説明会の参加率が 99%となっているのは、3 小学校合同の RG 授業参観を実施した日であったためです。

説明会では、保護者目線による 25 の質問や意見がこれまで寄せられています。例えば通学区域の広域化によって、新しい小学校では 70%以上の児童がスクールバスで通学することになりますが、到着時の混雑による安全面への配慮や、中学生との相乗りに伴う小学生の待ち時間の増加への心配などは、地域に根ざした保護者ならではの指摘でした。このような意見を踏まえ 4 校校長会



では、スクールバスの運行ルートと時刻を、教育委員会の担当者と協議して安全な運行計画作成の準備に取りかかるとともに、バス降車時の安全点検も深く検討することができました。また、学校と保護者をつなぐ SNS の機能として欠席連絡のアプリを追加することにもつながりました。これらは保護者の発議がもたらしたアウトカムと言えらると思います。私からは以上です。

ロジックモデルの実践の振り返り

(松本)最後に、実践の振り返りです。成果として3点あります。

1つ目です。ロジックモデルを校長会と共有しながら学校の現場の思いに寄り添って進めたことで、教育委員会からのトップダウンではなく、学校現場の主体意識が高まりました。

2つ目です。バックキャストの考え方が浸透し、目標の共有、いつまでになど視覚化することができ、学校再編に向けた取組みを具現化することができました。

3つ目です。校長会が主体でプロジェクトワーキングを推進してきたことで、これからの川根本町が目指す教育について教職員一人一人に浸透しました。

続いて、今後に向けて2点あります。

1つ目です。ロジックモデルについて何をもって評価とするか。検証方法や計画変更時の見直しについて、スピード感をもって臨機応変に対応し共有していきたいと思ひます。

2つ目です。これからの時代を生きていく児童生徒には、SDGs の考え方を深められるように、教育職員には ESD の考え方が浸透できるように、今後も継続して働き掛けていきたいと思ひます。

以上で川根本町の発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

夢のつり橋



人口減少地域における特色ある教育づくり

～ ロジックモデルを活用した持続可能な学校づくり～
川根本町学校再編を指向した仕組みの構築



令和5年2月27日
川根本町教育委員会

1



川根本町の紹介

小学校4校：176人
中学校2校：92人



【町域】

- 大井川沿い 南北約40km、東西約23km
- 南北に細長い形
- 面積は496.72km² (県全体の6.4%)
- 約90%を森林

【集落の範囲】 南北20km、東西15km

【人口】 6,078人 (令和5年1月現在)

- 町域全域がユネスコエコパークに登録 (2014年6月)
- 原生自然環境保全地域指定 (1976年3月/全国5地域、本州唯一)
- 「日本で最も美しい村」連合加盟 (2015年10月)

3

川根本町の紹介



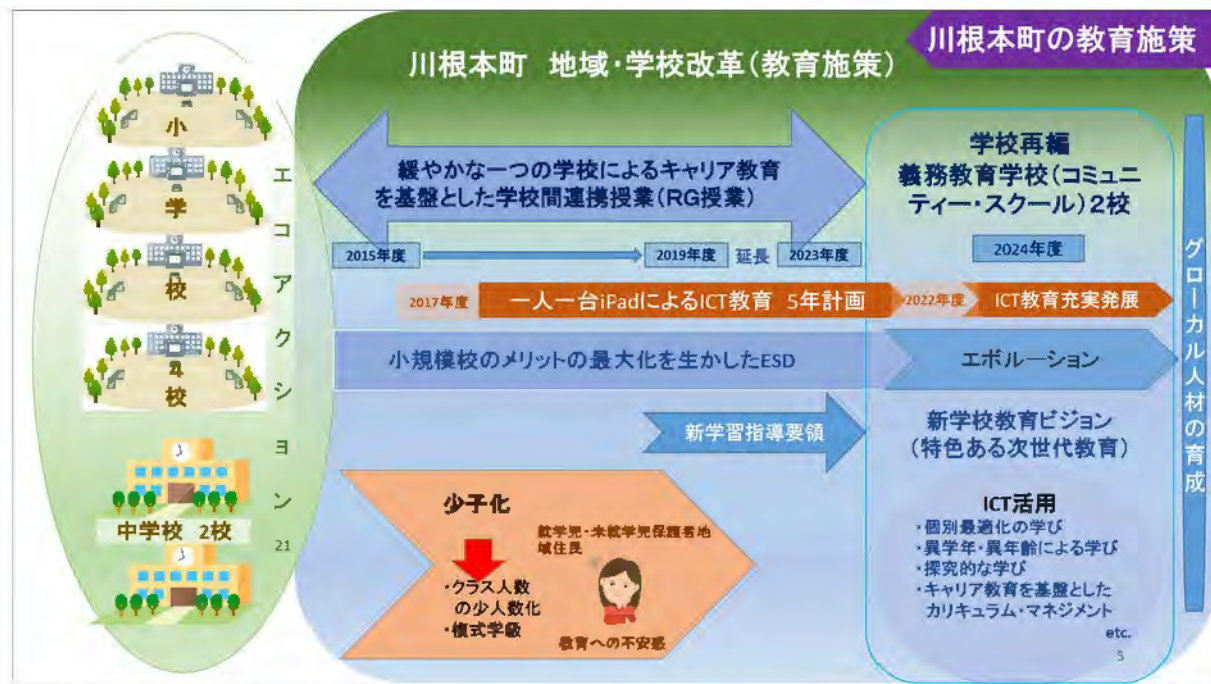
大井川鉄道南アルプスアプトライン
「奥大井湖上駅」

死ぬまでに渡りたい
世界の徒歩つり橋10選

「寸又峡夢のつり橋」



4



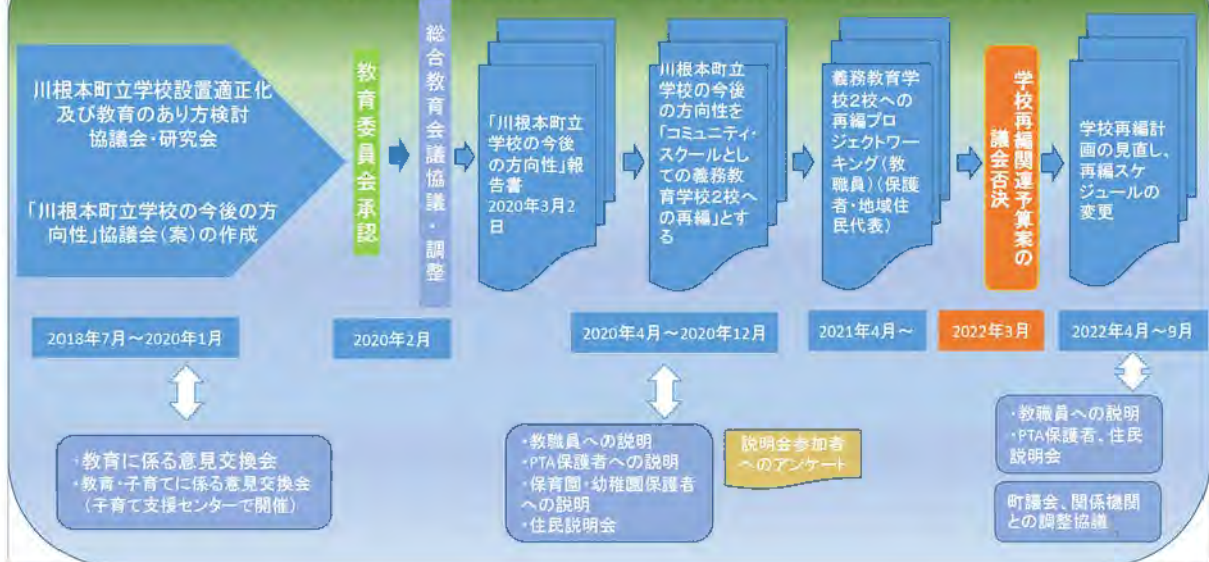
川根本町の学校教育

川根本町の教育施策

小規模のメリットの最大化 | 小規模のデメリットを最小化する工夫

- ◎学校教育ビジョン
 - ・将来の社会的自立に向けたキャリア教育の実施(キャリアノート)
 - ・学校間連携(RG)授業の実施(子どもたちは宝物、教職員は財産)
- ◎ICT教育推進事業
 - ・Wifi環境の整備
 - ・電子黒板(通常教室)+タブレット端末(教職員、児童生徒一人一台)
 - ・町独自アプリの開発、活用
 - ・9年間を通じた情報リテラシー、情報モラル教育の蓄積
 - ・校務支援システムの導入
- ◎川根本町型問題解決学習(深い学びの創出)の日常化
- ◎スクールバスを駆使しての合同行事の実施(修学旅行、音楽発表会、等)
- ◎連携型中高一貫教育(川根高校) ◎公営塾の運営
- ◎中学校教諭の兼務発令、町費負担非常勤講師の任用(教育効果の向上)
- ◎町独自の研修システム(合同研修会、RG作業部会、県外先進地視察、等)

川根本町 教育施策形成プロセス(学校再編計画推進状況)



川根本町立小中学校の再編

義務教育学校 開校年度

学校名	当初の予定	変更	
(仮称) 中川根学園	中川根第一小 中央小 中川根南部小 を1小学校に再編	令和5年4月	当初の予定通り (変更なし)
	義務教育学校開校	令和6年4月	
(仮称) 本川根学園	義務教育学校開校	令和5年4月	令和6年4月

contents

- 1 ロジックモデルを活用した持続可能な学校づくり
 - (1)ロジックモデルの概要
 - (2)ロジックモデルの進捗状況(令和2・3年度)
- 2 持続可能な学校づくりに向けて(令和4年度)
 - (1) ロジックモデルを活用した教育委員会の主な取組
 - (2) ロジックモデルを活用した学校の主な取組
- 3 実践を振り返って

9

1 ロジックモデルを活用した 持続可能な学校づくり

10

②<中間アウトカム>の検討 (R5~R6)

ロジックモデルの作成

【主として教育行政のアウトカム】

教育委員会が策定した学校再編計画と新学校教育ビジョン（次世代教育）について町民が理解し、保護者が提案型の学校評価をするようになる。

【主として教員の内発的なアウトカム】

教員が「持続可能な学校づくり」という視点で教育課程を検討するようになる。

教員が、ICTを活用しながら、コンピテンシーベースで授業を改善するようになる。

【アウトカム指標（例）】

「コミュニティ・スクールとしての義務教育学校の取組が理解できた」と回答する保護者 80%以上

【主として教育課程・教育活動のアウトカム】

※いずれも主語は「児童生徒が」

多様性を認め、他者を尊重するようになる。

他者とのコミュニケーションを積極的に図るようになる。

多様な方法でデータや情報を分析するようになる。

ESD
で育みたい力

地域を愛し、環境の保全・改善に努めるようになる。

適切なリーダーシップとフォロアーシップを持つようになる。

クリティカルシンキングを用いて代替案を考えるようになる。

【アウトカム指標（例）】

「自分の良さが分かる」「友達の良さが言える」と答える小中高生 100%

13

③<初期アウトカム>の検討① (R3~R4)

ロジックモデルの作成

【主として教育行政のアウトカム】

保護者・町民が、義務教育学校やコミュニティ・スクールのメリット等を知り、「持続可能な町づくり」の視点で学校再編を考えるようになる。

【アウトカム指標（例）】

住民説明会における、1会場の平均参加人数
地区住民の3%人以上

【主として教員の内発的なアウトカム】

ICTを活用し、習得主義で授業を構築する教員が、コンピテンシーベースで子供の表れを検証し、授業を評価するようになる。

【アウトカム指標（例）】

個別最適化に関する校内研修を実施した学校 100%

【主として教育課程のアウトカム】

教職員が教育活動をすり合わせ、教育課程に反映する他校の教育活動を十分に意識するようになる。

【アウトカム指標（例）】

令和4年度までのWG未処理案件 0件

願う児童生徒像

授業改善

教科担任制

生徒指導

PTAのあり方

特別支援教育

学校行事

教育計画書作成

校務分掌

部活動のあり方

成績表作成

制服のあり方

学校施設・設備



④ <初期アウトカム>の検討② (R3~R4)

ロジックモデルの作成

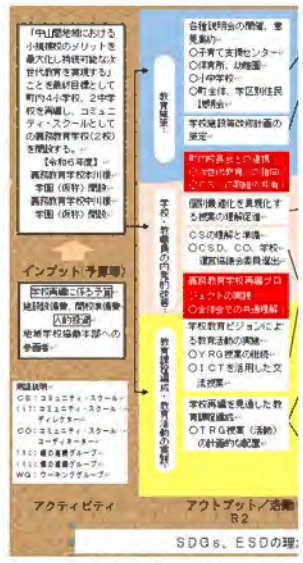
【主として教育活動のアウトカム】

育みたい力	児童生徒の初期アウトカム	教職員の初期アウトカム
多様性と他者の尊重	事象を多面的・多角的に捉えることができる。	道徳等で個別最適化された学びの実現を図る。
郷土愛、環境保全意識	地域を知り、資源の効果的な活用方法を考える。	総合を軸に、地域の教育資源を活用したカリ・マネを実現する。
クリティカル・シンキング	事象を否定的に捉え、事実や自分の価値観と比較検討する。	児童生徒の多様な考え方を肯定し、対話による解決を促す。
コミュニケーション力	意思を自分の言葉で表す。英語を積極的に活用する。	支援のスタンスを統一する。小学校で教科担任制を実施する。
データ・情報の分析力	情報収集と整理のツールとしてタブレットを活用する。	家庭学習も含めタブレットの使い方を検証する。
リーダーシップとフォロアーシップ	複数の異学年集団の中で、社会性を身に付ける。	小中一貫（連携）事業、TRG活動を実践する。

15

(2)ロジックモデルの進捗状況(令和2年度)

ロジックモデルの進捗状況

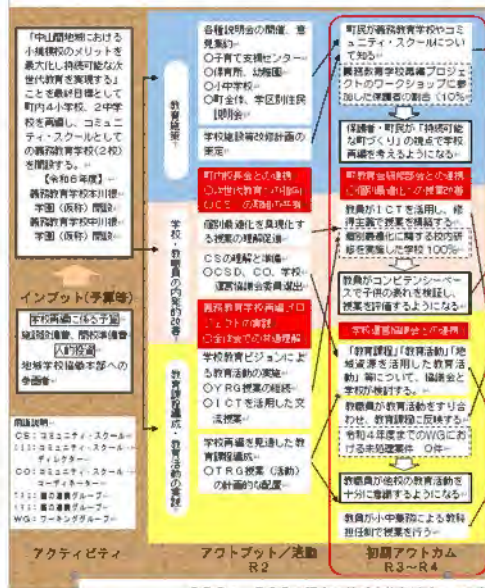


- #### 令和2年度の取組
- ・各種説明会での説明、意見集約
(小中学校、子育て支援センター、保育園、幼稚園、住民、議会等)
 - ・総合教育会議における方針の決定
 - ・アンケートの分析を基にした議会説明
 - ・義務教育学校再編に係る設計委託業務締結
 - ・コミュニティ・スクールのディレクター、コーディネーターの人選
 - ・義務教育学校再編プロジェクトの枠組みに関する協議(町内校長会)
 - ・次世代教育の実現を目指した「個別最適化」された学びの試行
(各学校異学年協業授業、東村山市立久米川東小オンライン交流他)

16

ロジックモデルの進捗状況(令和3年度)

ロジックモデルの進捗状況



令和3年度の取組

- ・コンピテンシーベースで語り合う義務教育学校再編プロジェクト全体会(4月)
- ・「地域・学校みんなで子供の未来を考えるワークショップ(7月)
- ・義務教育学校再編プロジェクトWG
教頭ワーキング
目指す児童生徒像検討部
学校の施設設備検討部会 ほか
- ・コミュニティ・スクールのキーパーソンの人選
- ・小中兼務教員による授業の乗り入れ

17

2 持続可能な学校づくりに向けて(令和4年度)

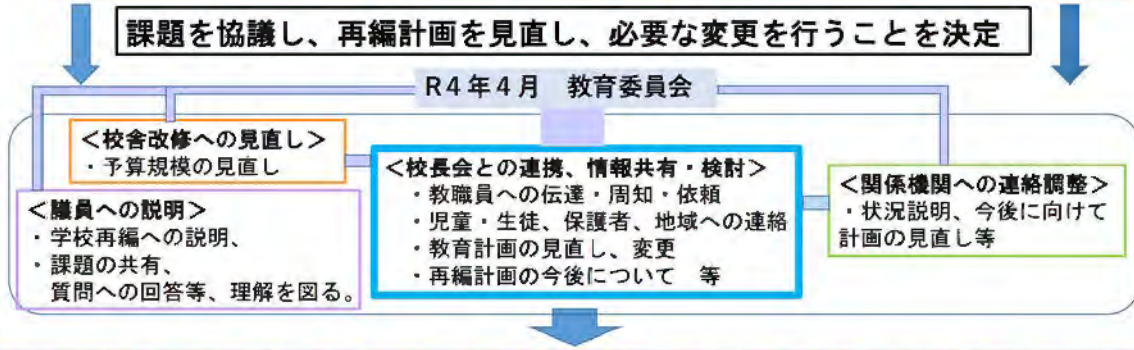
(1)ロジックモデルを活用した

教育委員会の取組

18

(1) ロジックモデルを活用した教育委員会の主な取組

令和4年3月議会→校舎改修工事を含む学校再編関連予算の見直し



8/18(木)臨時議会：建築工事予算を作成するための再設計業務委託料に関する補正予算について決定
 9/13(火)川根本町議会9月議会：令和5年度より3小学校を1つの小学校に再編する条例の一部改正が認められる。

南地域の3小学校
残り半年での学校再編

学校が主体となり再編計画を推進

※教育委員会⇄校長 <学校からボトムアップを>
情報共有・連携・相談・指示・依頼 等

アウトプット	アウトカム
毎月の校長会での進行管理・学校と教育委員会の協力	学校再編への意識の向上、計画的な準備・運営
保護者・地域への学校説明会の実施	学校再編への意識の向上、主体的な関わり
校名プロジェクトの実施(公募)	学校再編への意識の高まり、参画意識の醸成
視察研修の実施	川根本町ならではの学校づくり・授業改善への意識の向上
CSの試行的取組、学校運営協議会の実施	地域との連携・協働のよさを実感、当事者意識の向上

川根本町の川根本町を担う子供たちのための新しい学校づくり（川根本町型複合型教育学校づくりへの再編）プロジェクト
 南地域教育学校開校に向けた教育委員会実施事項 推進計画（修正案）

R4.5.28教育委員会内訳表

年	月	項目	内容	備考
R4	4	保護者地域説明会	現状報告と今後の見直し	説明会（4月19日開催、参加者170名、出席者100名）
	5	課長会議	現状報告と今後の見直し	以降、随時現状報告
	7	区長連絡会議	現状報告と今後の見直し	
	7	全員協議会 7/19(火)	説明会実施報告と今後の計画	各校の2学期以降の動きについて
	7	教育委員会	学校再編計画方向性協議	学校設置条例等
	7	校名教育委員会	学校再編計画方向性協議	学校設置条例等
	8	全員協議会 8/24(水)	総合教育会議報告、今後の計画	
	9	9月定例会	再設計業務補正予算（議決）	改修工事見直しに係る再設計
	9	再設計	改修工事見直し部分再設計案検討	
	9	再設計	ワーキングで必要事項検討	
	9	学校再編プロジェクト再開	R5中川郷3小学校再編に向けて	町校長会・教育会との連携
			地域部活動への移行について	
	9	課長会議	現状報告、依頼	各課への改善等の改善後の見直し等
	10	広報	学校再編の見直しや再設計について広報	広報かわねほんまように掲載
	10	公募(学校名)	学校名の公募、検討	公募(4月19日開催)・公募(4月26日開催)・公募(5月3日開催)
	10	議員教育委員会、町議会教育委員会	学校再編の進捗等確認	学校名の検討、決意
	10	南地域教育委員会へ問合せ	新小学校設置、廃止について	南地域一帯確認（現況把握、内訳等） 川根本町教育委員会へ問合せ

SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり



①学校説明会の開催 <町内6カ所計8回>
2022年(令和4年)8~9月

「川根本町が目指す
未来を担う子供たちのための学校づくり説明会」
「義務教育学校開校のスケジュール」を共有
「義務教育学校はどんな学校か」再確認



<参加者276名> (保護者95名、地域住民181名)
様々な意見や感想、御意見をいただいた。
主な質問や意見は、町のホームページに掲載

説明会ではパンフレットを配布



<内容> 左右…学校の再編計画
中央…川根本町が目指す義務教育学校開校までの大まかな計画
下…義務教育学校とはどんな学校か



保護者や地域の方からの主な質問や意見

- ・3月議会以降、保護者にとって何の説明もないまま今の説明会になっている。何かしら説明が必要でなかったかを感じる。
- ・子供達は4月に来年の再編はなくなったと聞いている。なぜこの時期にまた元に戻ったのか。子供への説明はいつだれがする予定か。
- ・子供達の不安ができるだけないように対応してほしい。
- ・今年度も半年を過ぎようとしている。来年に向けて間に合うのか。
- ・学校が空き教室になる場合、その利用について町はどのように考えているか。
- ・保護者としても準備があるので、決まり次第情報を教えてほしい。
- ・当初予算の修正案が可決され、工事内容の何を見直したのか。
- ・学校再編の目的は。
- ・どのような経緯で2校としたのか。どのような経緯で2カ所に決定したのか。
- ・2校の義務教育学校に再編後、人口減少等により、子供の数が減ってしまった場合、その後の再編をいつ考えるのか。等

再編への児童や保護者の不安解消を最優先に考えて対応

保護者・地域の方に見られたアウトカム

- ☆「子供達の不安ができるだけないように」という切実な思い
- ☆「決まり次第情報がほしい」という保護者や地域の意識の高まり

学校と連携 → 様々な配慮

- ①SCによる全児童面談の実施
- ②不安な児童・保護者へチームで対応
- ③学校を窓口連絡体制

SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり



②校名プロジェクト

「令和5年度南地域再編小学校の校名について公募」～アウトカム～

児童・生徒、保護者、地域住民へ発信したことで参画意識を高め、学校再編について考えるようになる。

2023年4月開校 川根本町南地域
新しい学校の校名募集
募集用紙はここです。
「自由におとりください。」

2023年4月開校 川根本町南地域
新しい学校の校名募集
応募箱
応募用紙は、ここへ

<公募結果> 合計90名60案
内訳 (小学生36名、中学生21名、一般33名)
※どれも思いや願いのこもった校名が多々あった。

川根本町南地域の新しい学校「校名」公募

RS1.6-

小学生4～6年生
中学1年生より意見を聴取

<資料4> これまでの経過と今後の予定について

① <募集要項を作成>

※応募資格、募集内容、募集期間、募集方法、誘客基準、スケジュールなど

② <校名募集（公募）> 11/9～12/8

※90名が応募、新学校名60案、思いや願いを込めた校名

③ <一次選考> 12/9～12/16

教育委員、南地域学校運営協議会委員の皆さんが候補を10点にしぼる。

④ <小学生・中学生から意見>

※選ばれた10名の候補について意見をいただく。

⑤ <二次選考> 1月

※教育委員会にて、小中学生の意見をもとに最終候補について協議、最終校名を決定

⑥ <議会で正式に決定> 3月

川根本町議会で案別改正し、正式に校名を決定する。

※各小・中学校の校長、主任、教頭、山吹開校C、文化会館に意見募集、保護者へ通知・募集について配布、町内全戸回覧、ホームページ、チラシ等で周知した。

教育総務課が、応募のあった校名を整理し、思いや願いをまとめ、教育委員、南地域学校運営協議会委員に配布し、選定を依頼した。なお、スケジュールの関係で、紙面での選定・協議とした。

各委員は選定後、意見を感想を添えて教育総務課へ提出。教育総務課は、提出された資料をまとめ、選ばれたものはすべて、二次選考の第一次候補とし、その中から、要項7の選考基準に該当するものを残し、候補を10点にしようとした。

教育委員、南地域学校運営協議会委員の各々に、校名候補の10点とその思いや願い等のコメントを見ていただき、選出の承認と意見を求め、承認いただいた。

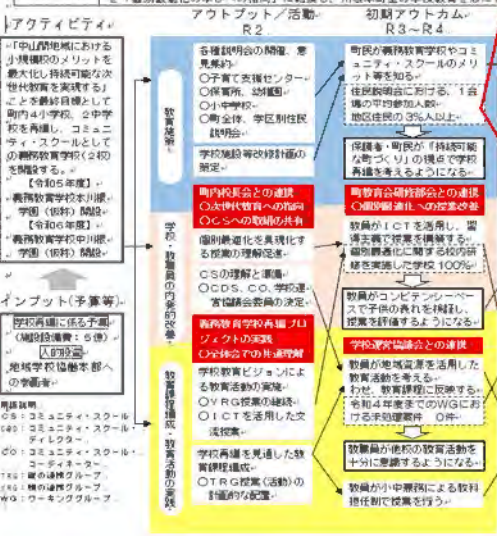
教育総務課が、4～6年生、中学1年生から意見や感想を聞き、資料にまとめ、教育委員へ配付し、二次選考の資料とする。

児童・生徒、地域の方に見られたアウトカム
 ☆ 校名選考を通して学校づくりへの参画意識向上
 ☆ こんな学校になってほしいという思いや願い



SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり

解決すべき問題・課題 持続可能な次世代教育の実現を目指し、町内4小学校と2中学校をコミュニティ型住民の理解を深め協働体制を構築するとともに、管理職をはじめとして4校を「個別最適化の学びへの指向」に転換し、川根本町型の学校教育を形に



③川根本町が目指す学校づくりの探究
 <県外視察の実施>

富山県南砺市立南砺つばき学舎 ※8/25(木) 26(金)

(参加者) 教育委員会職員
 町内小中学校教務主任
 (研修内容) 義務教育学校の進捗状況
 教育課程、特色ある取組
 について



名古屋市立山吹小学校 ※11/24(木) 30(水)

(参加者) 教育長、教育委員会職員
 校長、担任教諭等
 (研修内容) 自由進度学習について、
 個別最適な学びと協働的な学びの
 一体的充実を図るとは
 イエナプラン教育のコンセプトを
 生かした学び



南砺つばき学舎 視察研修



1年生から外国語活動、9年間で400時間上回る

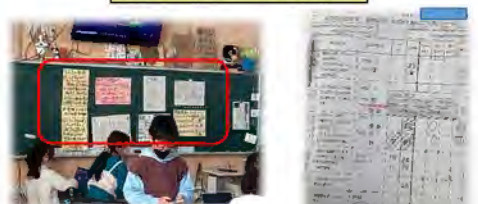
地域貢献をテーマに7～9年生のキャラクターデザイン開発



自学の時間、やりたいものをボードに提示、子供達が自由に選んで参加

教師に見られたアウトカム
 ☆ 新しい学校を自分たちでつくるという思いや覚悟の高まり
 ☆ 2校それぞれよさを生かした特色ある学校をつくるという意識の向上

山吹小学校 視察研修



自分で学び方や時間の使い方を選択

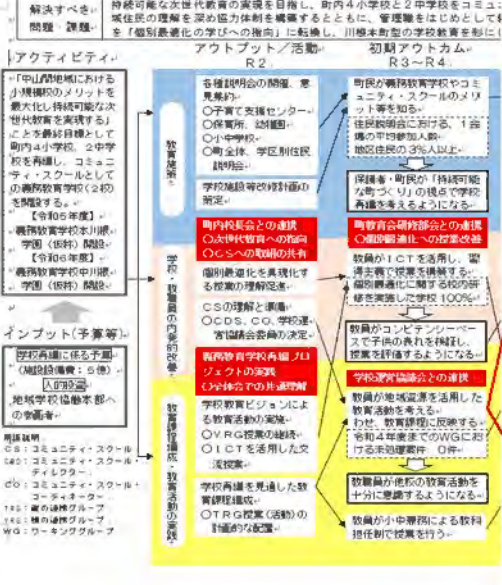
学習計画表、学ぶことや学習方法について記述



「一人で」「友達と」「先生と」自分で選択、学習内容を修得するためのツールも自分で選んで使用

教師に見られたアウトカム
 ☆ 川根本町のよさを生かした学校づくりへの意識改革の高まり
 ☆ 「できるところから真似してみたい」と単元の中での自由進度学習を推進

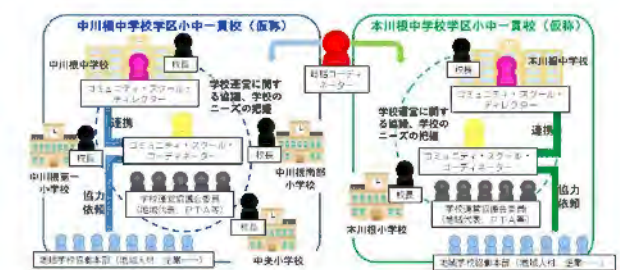
SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり



④コミュニティ・スクールの推進

R4年4月より試行的にスタート

- ・CSスタッフが学校と地域をつなぐー【延べ65回、179人】
- ・CSスタッフ企画・運営「わんぱくチャレンジスクール」
ー【地域の方による11の体験活動実施】
- ・南地域学校運営協議会、北地域学校運営協議会の開催
ー【南北とも各1回】
- ・CSだよりの発信 等



中川根第一小学校臨時保護者会

R4. 8. 23 (火)
教育委員会による学校再編説明会
(中川根第一小学区)
保護者の29.1%が出席
CSD(地元住民)も出席

CSDの発意

説明会終了後
保護者の戸惑い、不安を察知した
CSDが校長に保護者会開催を具申

スピード感

R4. 9. 2(金)、9. 3(土)
学校がPTA役員に相談の上
臨時保護者会を開催

説明した主な内容

- 児童の心のケア
- 児童の通学
- 相談窓口の開設
- 新しい学校の学校行事の大切
- 4校の教育活動のすり合わせ
- (仮)義務教育学校中川根学園の特色ある教育 等
- 使用する学用品
- 日課
- 保護者説明会の開催

保護者からの意見・要望

- SCによる相談体制の充実
- 新しい小学校での支援体制の充実
- 教職員の均等な配置
- 現小学校での活動の充実
 - ・学校への宿泊
 - ・思い出づくりの活動

学校・教委のアウトプット

- SCによる全児童との個別面談の実施
- RG授業の実施
- 支援員配置の予算化
- 人事異動作業への反映
- お別れ遠足
→ 3小学校で実施
- 学校での宿泊(第一小のみ)

児童・保護者に見られたアウトカム

- ☆ 「新しい学校で頑張ろう」という機運の醸成
- ☆ 学校行事への保護者の参加促進

33

② 児童生徒の取組

中川根中学校区の3小学校(一部の活動は中川根中を含む4校)の児童(生徒)によるRG(連携グループ)授業

4校校長会での主な検討事項

- RG授業実施の趣旨
- 児童生徒への仕掛け
- 日程、スクールバスの手配
- 教職員への仕掛け
- 教職員の配置
- 授業会場の調整

学校でのアウトプット

RG作業部会の実施

RG授業の実施

校歌、特別活動等について考える授業の構築

教務主任の連携による日程調整、バス手配

学校でのアウトカム

学校間の教員の相互理解促進と児童生徒の情報交換

目指す授業像の共有

ふるさとや新しい学校に対する思いの醸成

「教務主任発」の計画による教員の理解の向上

月	4校校長会	児童・生徒	教職員	保護者対応	その他
7	4校校長会①	再編に関する校長会議			学室などの環境調査
8	4校校長会②		4校合同委員会		
	教職員向け定例会①		3校合同委員会		
9	4校校長会③		2部分掌別ワークショップ①		校歌作成体験
	保護者向け定例会②		2部分掌別ワークショップ②		
10	4校校長会④			第1回学校説明会(対面形式)	RG活動予定話し合い
	教職員向け定例会②	RG授業①	RG授業①		学芸会、種立会検討会
11	4校校長会⑤		2部分掌別ワークショップ③		
	保護者向け定例会③		2部分掌別ワークショップ④	4校合同PTA主催委員会	
			2部分掌別ワークショップ⑤	第2回学校説明会(対面形式)	学校運営協議会
			2部分掌別ワークショップ⑥	第1年生保護者対象説明会	RG活動予定とPTAリンク
			RG授業作業部会①		スクールバス運行検討会
			1年生し編品等交流体験		校歌作成体験
12	4校校長会⑥		RG授業作業部会②(一斉)		第3回学校説明会(対面)
	保護者向け定例会④	RG授業②	RG授業②		第1年生対象保護者説明会
		RG授業③(参観)	RG授業③(参観)		
		校歌への意見募集に係るアンケート	校歌制作委員会		
1	4校校長会⑦		RG授業作業部会③		新教育計画策定
			2校合同委員会		
2	4校校長会⑧	RG授業④			
	4校校長会⑨	3校合同一日体験入学		第1年生対象保護者説明会	
		開校イベント	開校イベント	開校イベント	
3	4校校長会⑩		開校イベント	開校イベント	
			1年生し作業	引っ越しに係るPTA委員作業	

34

第1回RG授業 (R4.10.25)



1年生
「かもつれっ
しゃ」で人間
関係づくり



3年生
ジェスチャー
ゲームで楽し
く相互理解



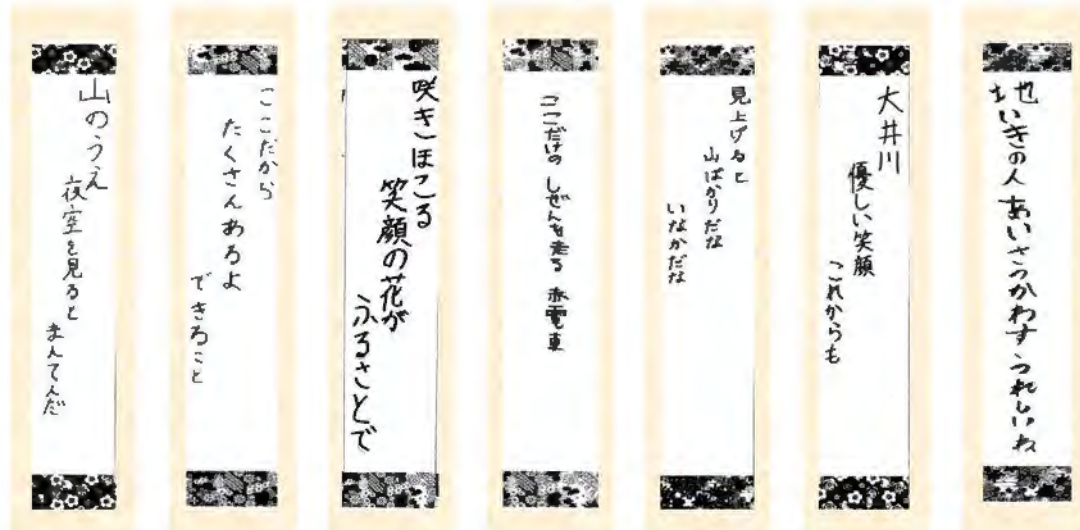
2年生
読み聞かせで
温かい雰囲気
の集団づくり



小4～
中1年生
ふるさとへの
思いをワーク
ショップで語
ろう

35

小4～中1合同RG授業「ふるさとへの思いを五・七・五で」 特選七首



36

川根本町内全6校による取組

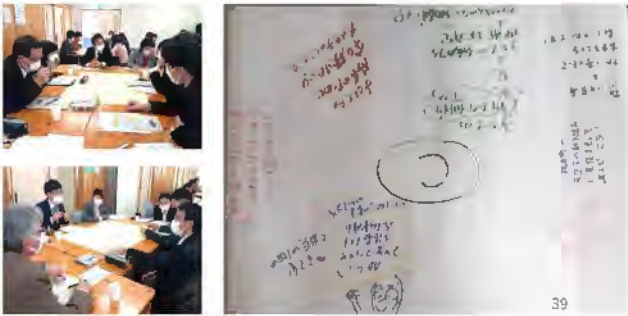


「個別最適な学び」に関する校内研修実施率 100%

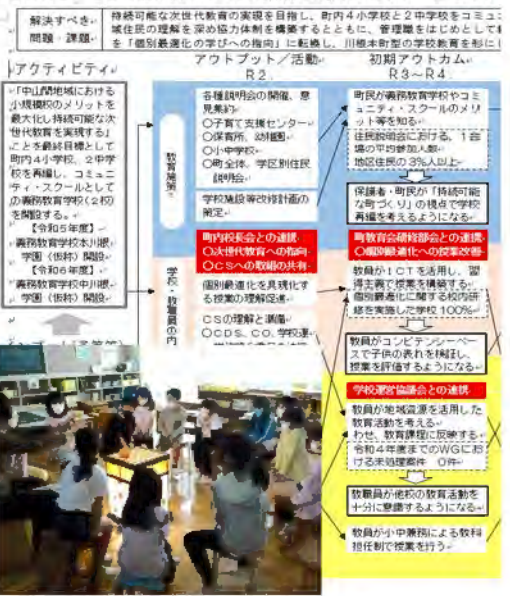
川根本町教育会全体研修会「イェナプランに学ぶ」(R5.2.8)

【参加者】川根本町内小中学校から教職員50名
川根本町教育委員会から3名
コミュニティ・スクール関係者3名
ICT支援員2名 計58名

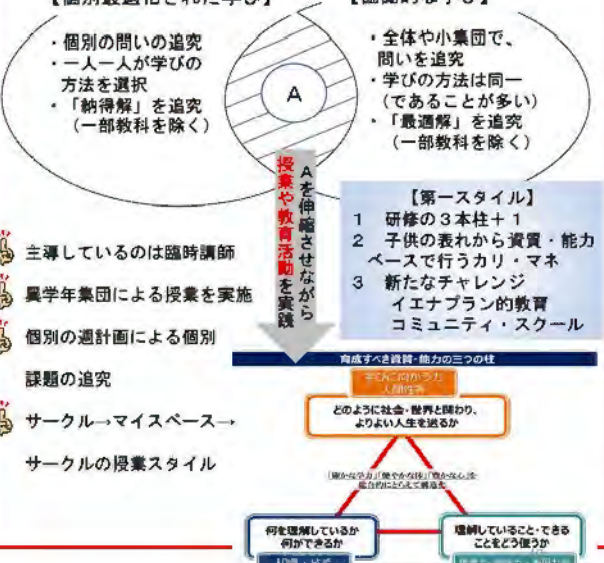
【内容】ワークショップ
「イェナプラン教育“20の原則”を考える
～教職員の観の転換を目指して～」



SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり



中川根第一小発「イェナプラン的学習」



④ 保護者を対象とした取組

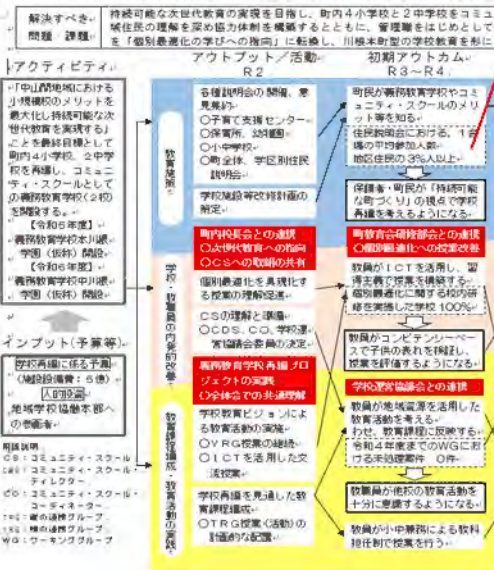
中川根中学校区の4校の保護者を対象とした合同説明会

主な検討事項	
<input type="checkbox"/> 開催日時と場所	<input type="checkbox"/> 開催方法
<input type="checkbox"/> 説明事項（内容）	<input type="checkbox"/> 外部との連絡、調整
<input type="checkbox"/> 教職員の出役	<input type="checkbox"/> 再編通信の発行

学校でのアウトプット	保護者のアウトカム
開催場所を均等に割り振り、全3回の説明会を開催	無理のない会場設定による参加率の上昇と理解の促進
対面とオンラインによるハイブリッド方式を実現	コロナの影響を心配せずに参加できる安心感
次回、次々回説明会を見通した説明事項の検討	段階的な理解の促進とスケジュール感の醸成
保護者の質問、意見を踏まえた計画の作成、修正	意見が反映される満足感と学校への信頼

日	4校校長会	法室・生徒	教職員	保護者対応	その他
7	4校校長会①	再編に関する校長会議			学生協との連携
8	4校校長会②		4校合同協議会		
			教職員向け広報紙①		
9	4校校長会③		教務分掌別ワーキング①		校務作成依頼
			教務分掌別ワーキング②		
10	4校校長会④			第1回学校説明会（対面）	2.5回切り書（対面）
			教職員向け広報紙②		
		RG授業①	RG授業②		
		4校校長会⑤	教務分掌別ワーキング③		卒業生 健全な生活
11	4校校長会⑥		教務分掌別ワーキング④	4校合同PTA本部委員会	
			保護者向け広報紙③	第2回学校説明会（対面）	学校運営協議会
			教務分掌別ワーキング⑤	第1年生保護者対象説明会①	2.5回切り書とオンライン
			RG授業作業委員会		スクールバス運行
			引越し準備等		校務作成依頼
12	4校校長会⑦			第3回学校説明会（対面）	
		保護者向け広報紙④	RG授業③	第1年生対象保護者説明会②	
			RG授業④		
		RG授業⑤	RG授業⑥		
		校長会への意見調査に保護者参加	教育計画書編成		
1	4校校長会⑧		RG授業作業委員会		教育計画書完成
			3校合同協議会		
2	4校校長会⑨	RG授業⑦			
		4校校長会⑩	3校合同一日体験入学	第1年生対象保護者説明会③	
			開校イベント	開校イベント	
3	4校校長会⑪		開校イベント	開校イベント	
			引越し作業	引越しに係るPTA委員発表	

SDGs、ESDの理念に基づいた持続可能な町づくり・学校づくり



学校再編に係る保護者説明会＜4校共催＞

回	実施日	会場	出席率
1	①10/18	第一小体育館&オンライン	小94.1%
	②10/19	中川根中体育館&オンライン	中21.1%
2	①11/15	南部小集会室&オンライン	小92.2%
	②11/16	中川根中MTスペース&オンライン	中14.0%
3	12/15	中央小体育館	小99.0%
			中47.4%

※中学校の出席率は「小学校に弟・妹がいない家庭の保護者の内、説明会に出席した保護者の割合」を算出。
 ※12月15日の説明会は、RG授業参観(小)と自由参観(中)の終了後に実施。



保護者目線からの質問、意見とアウトカム



Q 中学生と一緒にスクールバスで下校する場合、中学生を待つこととなりますが、その間の小学生の安全確保は大丈夫でしょうか。
Q スクールバスの乗降場所はどこでしょうか。バスの大きさや台数によっては、安全でスムーズな乗降に問題がないでしょうか。

A スクールバスの待機場所、待機時間、乗降場所等の状況を総合的に勘案し、町教育委員会と連携して、安全対策を講じます。なお、昨今の通園バス事故を受け、文部科学省が作成したガイドラインでは、降車点検を義務付けています。児童生徒の欠席については、メール、欠席連絡カード又は7:40~8:00の電話連絡にて、必ず学校へ御連絡くださるようお願いします。

スクールバスの運行ルート、到着時刻を勘案した運行計画と日課表の作成



Q 学用品（消しゴム、ノート等）が必要になった時に備えて、購買を取り入れてほしいのですが。

A 町内では本川根小学校で購買を実施しています。本川根小学校での取組を参考に、購買機能の導入について検討します。

購買の方法の検討、取扱業者との調整

3 実践を振り返って

- ロジックモデルを校長会と共有しながら、学校現場の思いに寄り添い進めたことで、教育委員会からのトップダウンではなく、学校現場の主体意識が高まった。
- バックキャストの考え方が浸透し、目標の共有、いつまでにどうなっているのか等、視覚化することができ、学校再編に向けた取組を具現化することができた。
- 校長会が主体でプロジェクトワーキングを推進してきたことで、これからの川根本町がめざす教育が共有でき、教職員一人一人に浸透した。
- ◆ロジックモデルについて、何をもって評価とするか（検証方法）、計画変更時の見直しについて、スピード感をもって臨機応変に対応し、共有したい。
- ◆これからの時代を生きていく児童生徒には、SDGsの考え方を深められるよう、教職員にはESDの考え方が浸透できるよう、今後も継続して働きかけていきたい。

44

ご清聴
ありがとうございました

45

指定討論者 佐々木 織恵(開智国際大学准教授)

川根本町の教育改革について、ESD ほりぷの一員としてコメントさせていただきます。

われわれ若手研究者から構成される ESD ほりぷという組織があり、研究者の立場から自治体の実践に参加させてもらったり、外部の視点を持って何かコメントしたりという事で自治体の改革に少しコミットするような活動を行ってまいりました。

具体的には、1つ目に自治体教育改革の支援のための理論枠組みの構築や自治体や学校改革の枠組みを検証するという取組みになります。2つ目が長期的ビジョンを持った省察を行う教師の育成支援ということになります。3点目として本来、成果・検証までやりたかったのですが、結果的には1点目と2点目のみの活動にとどまっております。

川根本町における ESD ほりぷの活動

具体的な取組み内容を説明させていただきます。

こちら(資料3頁)が川根本町さんのロジックモデルを最初に考える時のたたき台として作成したプロジェクト(SDGs P1)のロジックモデルです。川根本町の教育委員会の先生方とわれわれ若手研究者3~4人が一緒にワークショップをやりまして、この後登壇されるIMLの千葉さんにファシリテーターをお願いして、このような(資料4・5頁)形で「インプット、活動、直接アウトカム、中間アウトカム、最終アウトカム」に分けて整理していく活動を行いました。これによって川根本町さんがどのような改革を進めていきたいのかということが、教育委員会の立場から視覚化されることができました。これがまず1つ目の活動の具体的な例になります。

2つ目の「教師の省察を支援する」活動ですけれども、昨年度、教務主任の先生方を集めましてワークショップを行いました。実際に学校を再編した後にどのような教育課程をつくっていくか、集まった教務主任の先生方を対象にしたワークショップ活動になります。教育委員会が出している学校教育目標ですとか義務教育学校案について、先生方が具体的にどのように具体化して考えているのか、自治体レベルの全体の計画と自分たちの教育実践の認識の擦り合わせを図るワークショップのご紹介になります。

1つは、ジャムボードというGoogleのツールを使って行いました。黄色い付箋を z c x s 先生方に書いていただいて、例えば「夢に向かって志を持って未来を切り開く児童生徒」とは、具体的に「こういう子どもたちだよ」とか、「自分らしさを見つけて自ら学ぶ」というのはこういうことだよというように、お互いの認識を共有していくプロセスになります。もう一つは、逆に完全にボトムアップで先生方が目指す、こういう子どもたちを育てたいと、自由に付箋に貼って行って、それを同じカテゴリーに分けていく活動になります。このように先生方の認識を学校の再編計画と整合性を持たせる活動を昨年度は行ってまいりました。以上がほりぷの活動の説明となります。

社会の変化と教育の在り方～小規模自治体の切迫感～

私を中心として川根本町さんに関わってきましたが、伝えてきたメッセージは、教育委員会の先生方も認識を共通にしていると思いますが、「今後の社会の変化と教育の在り方を併せて考えていくこと」です。少子化ですとか環境保全ですとかを、まさに小規模自治体だからこそ、より切迫感を持って直面する課題にむしろ先取りする形で取り組んでいくこと、教育が次世代の育成の在り方を考える重要性をお話ししてまいりました。

OECDの報告書で言われていますが、今後の社会変化の予測をしている未来学者は、少子高齢化に伴って移民が増加してくるとか、地球環境の変化によって水不足や海面上昇が起こる、自然災害も増加してくる。テロやサイバー攻撃、経済的格差の拡大、雇用のオートメーション化、失業率の増加、肥満や自殺の増加、政治への市民参加の低下、こういっ

たことがこれからの社会で起こってくると未来を予見しています。

小規模自治体だからこそ直面する特に少子高齢化の問題、それから、自然災害の増加も切実な問題として捉えられてくることかと思えます。そういった中で学校の先生方は「今日、明日どうしようか。教育活動が増えるばかり」なので、目先の子どもたちの活動を考えがちですし、昨年度を踏襲するとか、これまでのやり方を踏襲することに陥りがちです。けれども、こうした社会の変化を見据えて、教育はどう変わっていかなくちゃいけないのかを考えていく必要があるかと思えます。

川根本町の未来と教育改革を繋ぐ構想

例えばユネスコが 2050 年の教育の在り方を示す報告書を、2021 年の 11 月に出しました。この報告書の中に「何を捨てて何を引き継いで何を再創造するか。これを考えなくてはいけない」と書いています。実はこの報告書が出される前から、川根本町さんのほうでは、同じ問いをもってすでに取り組んでいたのが、川根本町さんのお話を伺って衝撃的でした。10 年後の町に増えてほしいもの、変わらずにあってほしいもの、減っていったほしいものを考える中で教育の在り方を町として構想しているのが素晴らしいです。

これからの教育改革を考えた場合に、昨年度の教務主任の先生方を対象としたワークショップでも申し上げましたが、過去の慣習やこれまでの実践にとらわれないことが大事です。でも、ワークショップをやっている、これは結構難しいです。「なんでこの活動必要ですか」「そういうものだからです」という発言が割と多いです。これまでやってきたから必要とは必ずしもならないわけですが…。社会は変化していくので。10 年後、20 年後、30 年後にどのような地域社会をつくらしていきたいのか、そのための社会の担い手の育成として今の教育に何が求められるのを考える。これが先ほど川根本町さんがおっしゃったバックキャストの考え方になってくるわけです。

教師の働き方改革ですとか、主体的な学校改革から自己変革、自己変容の姿勢を子どもたちに見せることも大事になってくると思えます。Ecological Teacher Agency (ETA) という概念ですとか、ESD (持続可能な開発のための教育) の中で挙げられる「システム思考」といった理論的な枠組みとも、整合性がある考え方になってくるわけです。

ETA:エコロジカル教師エージェンシーと ESD におけるシステム思考

Ecological Teacher Agency (ETA) の概念は、教師の実践には、これまでやってきてもうまくいったからやるとか、これまでやってきてもうまくいかなかったからやめるといった、過去の実践から省察をして現在の実践に生かしていくというような反復的次元の側面もあります。それから未来投影的な次元、今後どうしていきたいのかから今の実践を振り返る。両方の側面が必要だと思います。ESD でよく言われるシステム思考の概念でも、過去と未来、そして現在をつなぐ視点が大事になってきます。自分を変容することと社会を変容していくこと、両方の視点が大事ですと言われるわけですが、既に持っているイメージとか価値観を手放して、そもそも何をどうあるべきなのかを問い直すことで新しい次元を再設計し実現していくことができると言われています。

この手放していくという、古い枠組みを手放していくことが難しいのですが、そうしないと新たな習慣とか価値観といったものは再創造も難しいことを、このシステム思考という理論が示していると思えます。

教育の在り方を学校や教師が考えたことの成果と課題

私が強調したかったのは、社会の変化の中で川根本町という自治体が直面する今後の課題を見越した中で、教育の在り方を学校や教師が考えていく必要性を申し上げました。川



根本町さんのお話を伺っていて、成果として現場の主体意識が高まったとおっしゃっていました。この下線が引いてあるところが、私が今日付け加える部分になります。特に保護者や子どもたちの意見の把握がなされたことが素晴らしいかと思います。こんな一言で申し上げるには本当に足りないぐらい、たくさんの苦労があったと思います。保護者の方々の意見交換が保護者会を通して行われ、子どもたちのケアといったところでスクールカウンセラーさんを中心に根気強い取組みをなさっていることもよく分かりました。保護者や児童生徒、地域住民、それぞれの考え方がある中で、なるべく同じ方向性を向いていけるように意見を把握する取組みをなされたのが素晴らしいです。

昨年度のワークショップを通して、教師が自分の言葉で変容を捉えられるようになったことも一つの成果かと思います。社会の変化とか少子高齢化とか、何か自分の言葉でイメージしにくい漠然とした抽象的な言葉を、身近な課題として自分の言葉で目の前の教育実践と結び付けて語れるようになる。それで初めて改革の担い手に先生方もなれると思うのです。数々の本当に大変な取組みをされてきたと思いますけれども、そういった意味で全てそういうところにつながってきているかなと思います。

一方で課題ですけれども、第1に、成果の検証と目標の見直しをおっしゃっていましたけれども、持続可能性だったり個別最適化だったり、教師の内発的改善だったり、いろんなキーワードが入ってきているので、それがどうつながってくるのか、その整合性は、絶えず再考していく必要があると思います。

第2に、アクションコンピテンシーという言葉です。特に持続可能性を考えた場合にクリティカルシンキングとかによって代替案を考えるだけではなくて、行動できることが重視されています。昨年度の教務主任の先生方のワークショップでも「実際に町での活動を通して自分も町づくりに貢献できる機会を子どもたちに提供できないか」というお話も出てきました。ぜひ行動できるところまで児童生徒の能力を高めることを期待します。

第3に、一番難しいと思いますが、社会変容、それから自己変容という言葉には、とても難しさがあります。何がゴールかを明確に定められないところだと思います。学校教育は目的があって単位ごとの目的とか年間を通しての目標があって、ある意味でそこに達成するために先生方は頑張っている。それが教育活動だと思いますが、社会の課題から教育の役割を考えると、何を目標とすべきかがすごく抽象的で分かりづらく、共通の認識として持ちにくいといったところがあります。そうするとロジックモデルのような、ある意味目標をきちんと定めてバックキャストで何をすべきを考えていく、ある意味、リニアなモデルっていったものが限界を持つ難しさがあると思います。この点に関しては、次の第3部のほうで千葉さんのほうからもお話があると思いますし、まさに複雑系で考えなくてはならないといった部分かなと思います。私のほうからは以上です。

意見交換

森（司会） 今日月曜日で学校は授業があるので先生方はなかなか参加しづらいかなと思いますが、今の佐々木さんのキーワードとして保護者の話とか教務主任の先生のこととか結構ありました。土日ですとそういう方々にも聞くことができるのでちょっと残念ですが、一部管理職の方とか参加している方もいらっしゃいます。佐々木さんのこのコメントをお聞きになって私としては川根本町の山下先生、松本先生あたりにこのような非常に素晴らしい分析といいますかされたので、ご質問とか感想がありますでしょうか。対話ができたらいいと思いました。

山下 佐々木先生には、なかなか直接お出でいただけなくてオンラインでいろいろなご指導をいただきました。今お話を伺っていて、やはり成果として、教職員が自分事

としてこれからの教育を考えたり、これから川根本町で目指す教育について自分の言葉で語ったりできるようになりつつあります。そういう先生方の変容が、主体的に行動できる子どもたちにつながっており、実は幾つか子どもたちが町のほうに働き掛けて実現したことがあります。

今ぱっと自分が思い付くのは、中川根南部小学校 6 年生が「町の紹介したい良いところ」を総合的な学習などで取材をしまして、それを動画にまとめました。その動画を、日本語と英語とで動画を作って町長にお見せしたところ、町長が大変いいものだというので、これはぜひ町のホームページにアップしましょうということ、川根本町の子どもたちが作った紹介動画を町のホームページにアップさせていただいています。

そんなふうに子どもたちは、自分たちが学んだことを実際に町長にアプローチをして町長が取り上げてくれて、それが町の紹介ビデオとして実際に公開されているというような取組みは、小学校 6 年生が行いましたが、やはりそうやって自分たちの力で社会というか世の中が変わっていくんだというような、そういう小さな第一歩を踏み出したことがあります。やはり教職員が大きく変容すると、子どもたちはやはり主体性が増していくことは実際に感じたことがあります。

課題として、方向性を明確に定められない難しさがあり、やはりなかなか今本当に価値の多様化が進んでいて教育も何を狙っているのか、まだ迷っている現場の教職員はいます。特に、経験値の少ない若い教職員については経験がないものだから、いろんな目の前に来る情報によって左右され迷ったりすることがあります。その時にやはり学校の組織の中で、同僚性の中で OJT の形で若い教職員と関わりながらみんなで方向性を定めていくというか、そういうふうなことがうちの町の教職員の組織の中で、今できております。

やはり校長のリーダーシップというものが本当にそこには欠かせないのですが、先ほど渡邊校長が発表したように、町内の校長会が主体的にどんな教育をやっているか、どんな学校づくりをするか。教職員にどのように働き掛けるか。そこら辺を本当に主体的にやってくれています。ですので、教育委員会からトップダウンで下ろすのではなくて本当にボトムアップで進んでこれているという、そんな実情があります。

森 大変素晴らしい川根本町の事例を報告していただきましたが、佐々木先生からお聞きになって感想、コメントがあればお願いします。

佐々木 先生方が変容していくことで子どもたちも変わっていくことが、すごく興味深く、ぜひ質的な分析をしたいなと思いました。同僚性というキーワードも出されて、それもすごく大事だと思うんです。良くも悪くも何か一つの方向にしなきゃいけないっていうことは、逆に危うさも日本の教職員集団って持っていると思います。ですので、それぞれがそれぞれの立場でできることを考えるという寛容性も大事にしつつ助け合いながらお互い学び合うという両方の価値を大事にする実践もまた大事なかなと思いました。

森 先ほどの川根本町さんの報告では、校長のリーダーシップ、校長会が非常に主体的ですね。校長のリーダーシップとは、トップダウンではない。教務主任の方のワークショップによって実践を担う教師集団が主体的に動けるサポートを、そこを担う先生方の意識を変えていく取組みを行う。ある意味でこれは力のいることですが、上からトップダウンでやるのは簡単かもしれないけど、そうじゃなくて本当に先生方が主体的に参加できるような、そういう意識にまた態度に変えていくようなサポ



ートを、校長会のほうでやられたのかなと思うんです。そういう意味では非常に大事かなと思いました。

梅澤

南砺市さんは最終的にロジックモデルつくらなかつたのですが、川根本町さんは渡辺先生（当時管理主事）が積極的に作成（まとめ）を行ってくださって1昨年（2021年）7月のシンポジウムでも発表していただきました。

今現場に戻られて校長先生を務めながら先ほどの実践報告をお聴きして素晴らしい取組み（実践）を困難さを乗り越えて行っていると思いました。そこで、まず当時ロジックモデルをつくりながら感じたことはなにか、また現場に校長として戻ってロジックモデルの作成の経験をいまどう評価しているかについてお聞きしたいです。

特に後者については、7月シンポジウムの議論では、学校現場でコミュニケーションツールとして利用できること、バックキャストの思考で目標到達までにやっておくことを考え合意形成していく、そのための重要なツールとなる議論をしました。そこで、校長先生として現場に戻られた渡辺先生は、今の感覚としてロジックモデルをどう考えているのかお聞きしたいのです。そのことが、このプロジェクトとしては焦点になっているので、よろしくをお願いします。

渡邊

ロジックモデルの作成に携わってきたことが結果的には学校現場に戻って非常に大きな力になったことを、今回この（第3回）シンポジウムの資料をまとめた時に強く感じました。ロジックモデルはアウトカムから考えていきますので、そのためには教員がどのような動きになったらいいか、校長はどんな仕掛けや働き掛けをするべきかと考えることができます。その点で、教職員の内発的な意識を喚起するツールとして、ロジックモデルは非常に重要ではないかと感じております。

特に今回、学校再編、教育長の説明にもありましたが、学校再編が12カ月かけて行う予定が7カ月に短縮されてしまったので、かなり事務手続きもスピード感を持ってやっているわけです。佐々木先生からお話のあった教務主任による昨年度のワーキングが昨年度非常に役立ちました。佐々木先生からの資料にもありました教務主任とのワーキングの中で、ジャグボードの資料がありましたが、あそこに出てきたメタ認知ですとか、それから社会をつくっていく力だとか、こういったものが実は7月に急きょ校長として新しい学校のグランドデザインをつくらなきゃいけないといった時に、それをキーワードとして子どもたちの付けたい資質・能力と位置付けることができたんです。

それ（ワーキング）をやることによって教務主任がまず理解をする、理解を示す。教務主任が理解を示すと職員が一緒になって（取組んでくれる）。そういう雰囲気醸成されてくるんです。そういった意味でも、ほりぷのみなさんを交えたこのプロジェクトの取組みは、ロジックモデルの効果と相俟って学校づくりにとって大きな力になったと感じています。

小岱

静岡大学教職員大学院の小岱と申します。この教職大学院の修了生が川根高校の魅力化推進室の室長をやっております。地域との連携、地域の活性化にも尽力しています。そういう中で探究学習が、川根高校は非常に進んでおりまして、県内でコンテストがあるんですが、トップ賞を続けて取ったり全国的にもそういったところが文科省にも認められているんです。今（2023）年2月の初めでしたか、地域交流会が行われまして、今日の教育委員会のご報告では小中連携しか出てきませんでしたけれども、川根高校では小中高の一貫制を見据えながら取組みを進めている一つのアピールポイントだと思います。地域交流会を参加して思うことは、中学生の探究学習の着眼点、やはり必然性とか切実感があるので非常にいいです。その一端を

教育長さんが先ほどお話ししてくださいましたが、補足しますと、パフォーマンスとしても高校生のプレゼンテーションなどが本当に優れていて、洗練されているんです。私、県内のいろんな中学校を廻っていますが、都会というか静岡市の生徒とかいろんな市町の子どものプレゼン見えていますけれども、川根高校は中山間部だからと言って、物おじする、アピールしないかという、そんなことなく非常に上手なんです。だから、そういう意味で子どもの変容っていったら、探究学習を通じて非常に子どもが変容していると思います。そこら辺の手応えも教育委員会のみならずもあるのではないのでしょうか。お話しいただければと思います。

山下 小岱先生には川根高校の体育館でお会いしました。川根高校での地域交流会で高校生の発表だけではなくて連携中学校が3つあります。中川根中学校、本川根中学校、川根中学校。それぞれの中学校の2年生が全員参加をして、その中の代表の子が総合的な学習で研究したことを代表で発表していました。それで、その後は高校生が体育館のブースをつくりそこでポスターセッションのような形でいろんな発表をしていました。

やはり高校生は中学生の発表をすごく、肯定的にというか温かく見てそれで質問を返したり、高校生の発表を中学生が聞いてそれを質問したりとか、そういう交流が非常に深まっていて、地域の方がそういう様子をご覧になっているわけです。そういう本当に中身の濃い中学校と高校との交流の場だったんです。今後、義務教育学校になっていきますので小学生を交えて小学生、中学生、高校生の交流が、学びを通してできればと非常に強く感じ、川根高等学校の校長ともそのような話をしました。まず川根高校の校長と話をしたのは、町内の小学校、中学校の校長と県立高校の川根高校の校長と何か懇談を持ちまして、同じような交流の取組みができればいいなという話をしているところです。

森 小中高校生が交流する背景には、いま議論されたような小中高の先生方の協働があって、それが力になっています。そのような素晴らしい可能性が今回の報告と議論で行われたかと思います。ありがとうございました。



ESD実践の基盤となる公立学校の組織・カリキュラムのモデル開発 複雑系の実践⇔制度のアプローチの枠組み ～令和の教育にビルドインする～

川根本町の教育改革

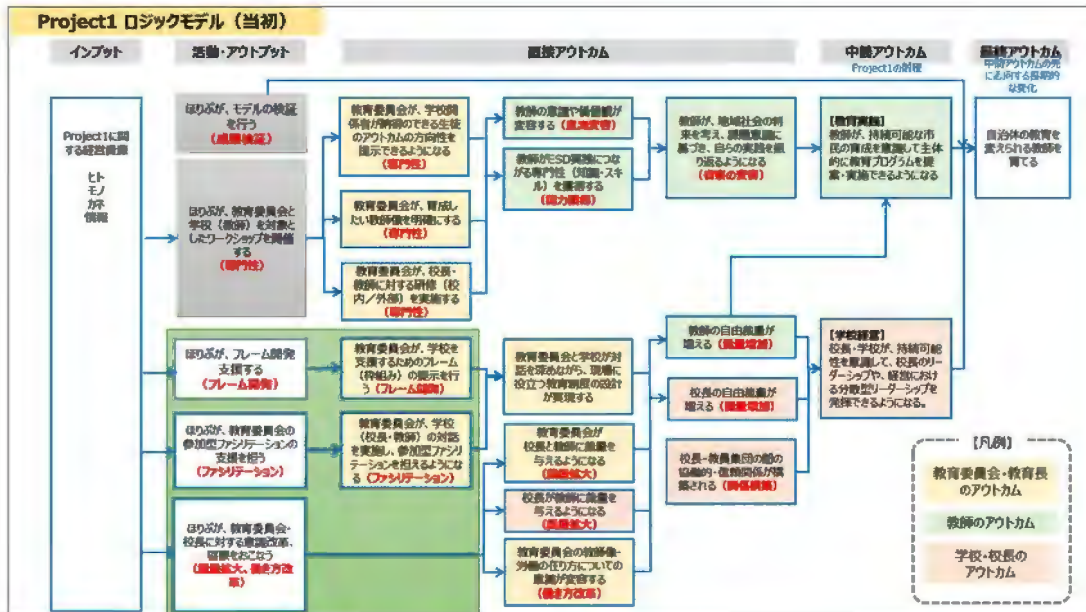
佐々木織恵

ESDほりぷの活動

1. 自治体教育改革の支援のための
 - ・理論枠組みの構築
 - ・自治体・学校改革の枠組みを検証
2. 長期的ビジョンを持った省察を行う教師の育成支援
 - ・ワークショップ・研修会や形成的評価を通じた教師の育成支援
3. 本プロジェクトの成果検証

を目的に、30～40代の研究者を中心に組織

* ESDほりぷ("HoRIP")は、「ESD関連の内在的な教師実践をホリスティックな公立学校改革に結びつける枠組み研究会」A framework study group that links public schools to holistic reform through the intrinsic teacher practice of ESDの略称



各学校が目指すビジョンを言葉化する

R8 中川根学園(仮)義務教育学校(案)

学校教育目標 「未来を拓く」

目指す児童生徒像

- (1) 夢に向かい、志を持って未来を切り拓く児童生徒
- (2) 「関わり」を大切にして、ふるさと川根本町を愛する児童生徒

児童生徒に育みたい資質・能力

- ★自分らしさを見つけ、自ら学び、考え、判断し、行動する力
- ★未知の問題に対して自ら立ち向かい、Try&Errorを繰り返しながらやり進めることができる力
- ★持続可能な社会を目指し、次代の地域を共に創っていく力
- ★寛かな感性を持ち、感動を分かち合う力
- ★他者の存在を認め、多様な関係を結ぶ力

他者を存在を認める

※重点目標は児童生徒の実態に応じて、管理・統括から決定する。- 義務教育学校に向けた基本構想 -

義務教育学校に向けた基本構想

「学力や体力の増進」、「心の教育の充実」、「地域とともにある学校」を目指し、9年間の教育からこそできる教育を進めていく。また、コミュニティ・スクールが始まることから、地域から愛され、地域に根ざした教育を進め、児童生徒、教職員、保護者、地域住民が、共に成長し、共に地域を創るという理念に立った学校づくりをしていく。

ふるさとを誇り上げて、ふるさとを愛する児童生徒を育てたい 守谷

ふるさとを愛する

人との関わりでのワクワク、ドキドキ

新しい学び、活動を通してワクワク、ドキドキ

自分らしさを発見し、自分を大切にできる

自己肯定感

自分らしさを発見し、自分を大切にできる児童生徒

主体的な子ども

自分に自信をもつ

主体的な子供を育てたい 鈴木

他者を認める、多様な、いろんなものに触れる

自信を持って、この学校で学びたいと思ってもらえる

望みたい子どもの変化

「自分はこんなことができるようになったんだ。」と、自分の成長や変化を感じることができるようになる。 藤田

成長実感

「自分の弱さを、(行事)で克服したい」と、課題に向向きに向かうことができる。 藤田

自分で考え・行動できる 鈴木

失敗を恐れずにやってみる姿 相澤

まずはやってみる勇氣 守谷

失敗を恐れず挑戦する子ども

人との関わりでのワクワク、ドキドキ

自分らしさを大切にできる

新しい学び、活動を通してワクワク、ドキドキ

自分に自信をもつ

他者を存在を認める

自信を持って、この学校で学びたいと思ってもらえる

ふるさとを愛する

他者を認める、多様な、いろんなものに触れる

あたたかなあいきつ 地域を知りたい、地域の人を知りたい 守谷

地域との関わり合い

メタ認知した上で行動する子ども

友達といっしょに活動することを楽しみたいと感じる 鈴木

自分の知りたい、やってみたいを言葉にうつしたり、他者のそういう気持ちを大切にできる。 守谷

関わり合いと認め合い

黄色を実現するためには、どんな子どもの変化を目指す必要がある？

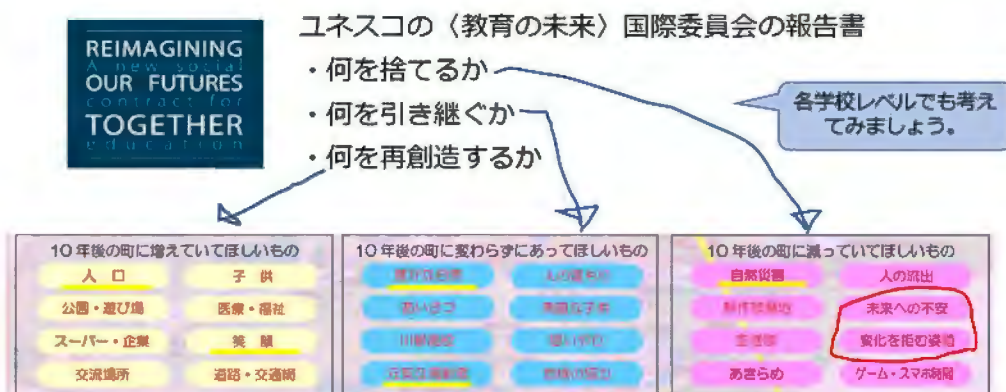
今後の社会変化の将来予測

- ・移民の増加 (←少子高齢化)
- ・地球環境の変化 (水不足、海面上昇)
- ・自然災害の増加
- ・テロやサイバー攻撃
- ・経済的格差の拡大
- ・雇用のオートメーション化
- ・失業率の増加
- ・肥満や自殺の増加
- ・政治への市民参画の低下 (←政府に対する信頼の低下)

OECD, Education 2030



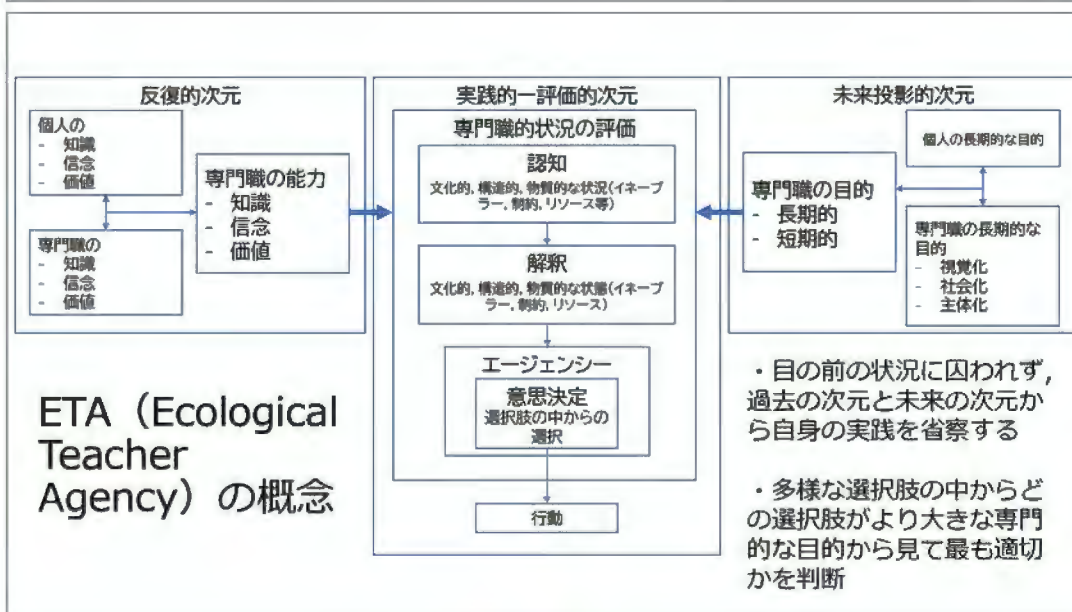
変容を促す教育

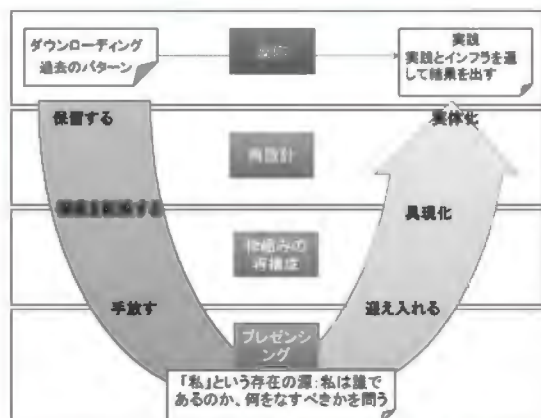


これからの教育改革の要点

- ・過去の慣習やこれまでの実践にとらわれない
- ・10年後、20年後、30年後にどのような地域社会を作っていきたいか、そのための担い手の育成として今の教育に何が求められるのかを考える
- ・教師の働き方改革、主体的な学校変革から、自己変革、自己変容の姿勢を子どもたちに見せる

- ETAの概念への注目
- ESDシステム思考への注目





システム思考（U理論）

・新たな社会像をイメージして学習者が持っている前提や価値観を問い直す、自分自身と社会を変容させる学びのプロセス

・U字の左側は古い枠組みを手放し崩していくプロセス、右側は失敗を経験しながら、新たな習慣や価値観などが作られていく再創造のプロセスを示す。

ロジックモデルの成果と課題

【成果】

- ・校長会の主体意識、保護者や子供たちの意見の把握
- ・バックカスティングの考え方、目標の視覚化
- ・教師が自分の言葉で変容を捉えるように

【課題】

- ・成果の検証と目標の見直し
- ・アウトカムとインプットの整合性を再考する必要性
- ・代替案を考えるだけでなく、行動できる児童・生徒の重要性
- ・変容の方向性を明確に定められない難しさ

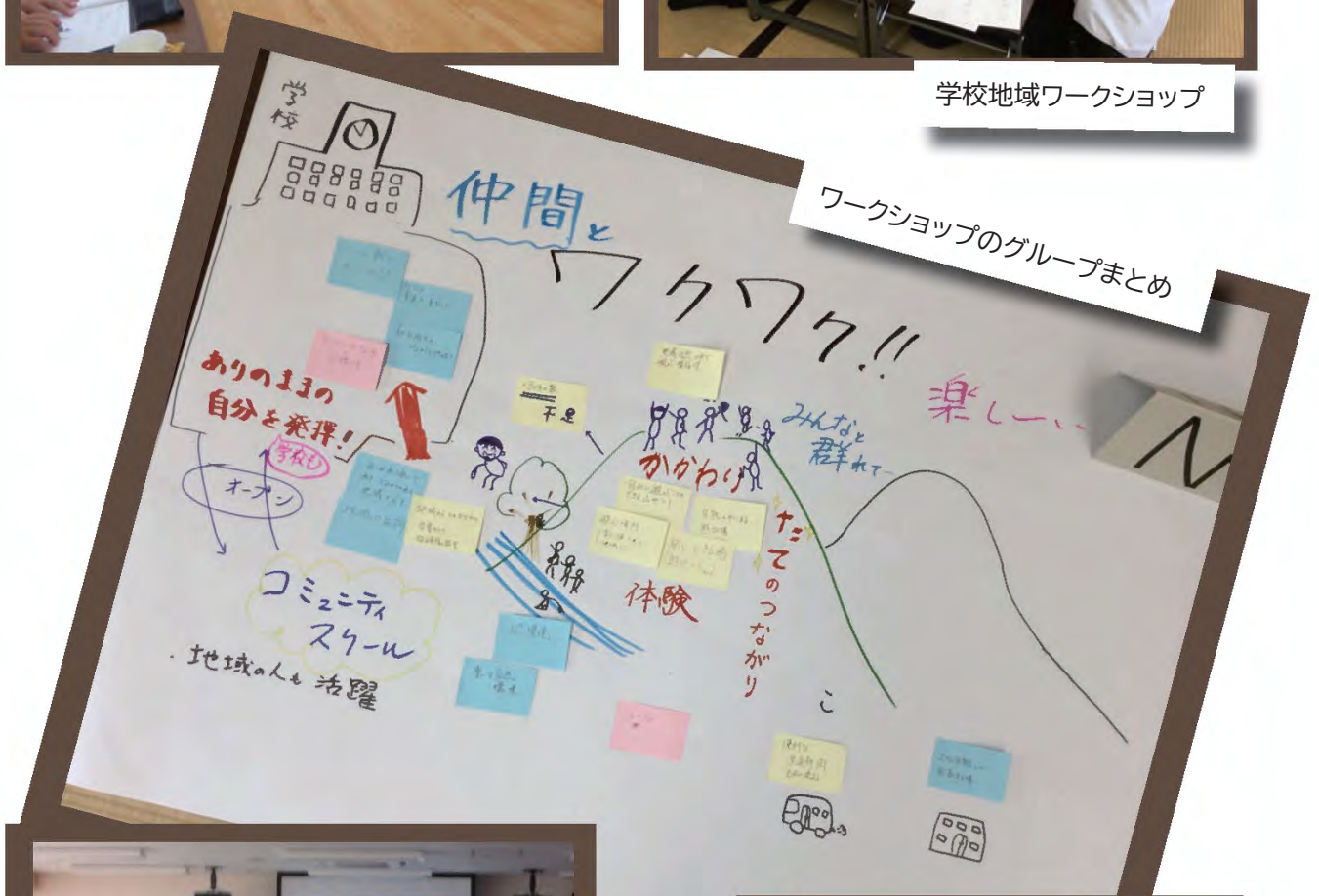
プロジェクト 活動の様子



南砺市での協議会



学校地域ワークショップ



ワークショップのグループまとめ



町教職員研修会





エコティ

写真提供：川根本町まちづくり観光協会
南砺市観光協会「南砺フォトライブラリー」
南砺市教育委員会・川根本町教育委員会

2022年度

SDGs プロジェクト1 成果報告書(3年次)

2023年 3月31日 第1版

連絡先：静岡大学教育学部 梅澤研究室
住所：静岡市駿河区大谷 836
TEL/FAX：054-238-4699
e-mail：umezawa.osamu@shizuoka.ac.jp

教育改革

複雑系の実践⇔制度のアプローチの枠組み

学校再編

「令和の教育」をデザインする



国立大学法人

静岡大学

National University Corporation
Shizuoka University

持続可能な学校づくり